大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.42　　2003. 4. 1.

目次

	真宗総合研究所の役割	1
目	2003年度「指定研究」研究組織一覧	2
	2003年度「指定研究」研究目的紹介	4
	2003年度「一般研究」選考結果発表	9
	2003年度「一般研究」研究目的紹介	10
次	2001年度「指定研究」研究経過報告	14
	2001年度「一般研究」研究結果概要	27
	彙報	33

真宗総合研究所の役割

真宗総合研究所長　兵藤一夫

真宗総合研究所は、発足以来、節目節目にその意義が見直されてきた。昨年、真宗総合学術センター（響流館）が完成し、研究所もそこに移転して名実ともに大谷大学の総合学術拠点の一翼を担うことになった。これを機に、今一度、真宗総合研究所の役割について考えてみよう。

大学を取り巻く社会の情況は近年大きく変わっている。20世紀を主導してきた科学・技術は、一方では、便利で快適な社会を実現しながら、他方では、様々な深刻な弊害を生み出している。中でも、情報技術の急速な進展はインターネットを中心とした情報ネットワーク社会を到来させ、社会の仕組みや生活様式を大きく変えつつある。また、しばしば指摘されているように、20世紀の終わり頃には、地球環境や生命倫理などにとって科学技術がもたらす負の面は予想をはるかに超えるほど大きいことが明らかになり、それまでの科学技術の進展を根底にした既存の価値観や社会のあり方を見直し変革することが指向されている。特に、日本では、経済的バブルの崩壊と重なったことにより、その変革へのもがきは一層大きく深いものがある。その中で、大学は今まで以上に社会に関わり、連携することが求められている。社会の変化に目を向けるだけでなく、社会のニーズや変革の方向にもっと敏感であることが求められているのである。

このことは、今の社会の中で大きなうねりになりつつある経済的視点に立ったグローバル化や効率追及の流れに無批判に迎合することでもなく、また、多くの大学が目指すような、科学技術の負の面や行き過ぎを科学的良識によって克服しようとするあり方、科学中心主義とでも呼び得るもの、をそのまま受け入れるものでもない。科学の根本的な面への批判の眼を持つ仏教の立場から、社会に関わることが必要である。そして、このような形で本学が社会に関わることが仏教を社会に開放するという建学の精神にも合致することになり、このことは結果として、他の大学との差異をもたらすことになる。

本学は、仏教を社会に開放するという建学の精神に基づきながら、社会の求めに応えていかなければならない。その場合、真宗総合研究所はその中心的な役割が期待される。研究所は、これまでも本学が社会において果たすべき役割に留意しながら研究（特に指定研究）活動を行なってきた。設立時の重要な柱であった、(1)本学の歴史を明らかにする中で、本学のアイデンティティーや建学の精神を明確にすること、(2)本学の所有する重要な学術成果や資料を紹介し公開すること、(3)海外を含めて、最近の真宗・仏教関係の文献を収集・整理し、学外の研究者や研究機関との交流や共同研究の拠点となることの三つは、基本的に今もそのまま研究所の指定研究の中に受け継がれている。そして、これらは今後も研究所の核として継続すべきものであろう。

ただ、現状において考慮すべき点は幾つかあるように思われる。一つは、指定研究の数と組織についてである。指定研究が、(1)真宗学事研究(2)国際仏教研究(3)仏教文献研究(4)現代思想研究の４部門に拡大整備されてから今年度が３年目となり、３年区切りの最終年度を迎える。研究課題について、大学として行なうべきか、あるいは個人で行なうのが適当であるのかを再度明確にすることによって、その必要度や優先順位が再検討されるべきであろう。その場合、各指定研究班は、人数等を含めて適正な組織のあり方も検討されるべきである。また、その際には若い研究者の育成という面も考慮すべきであろう。二番目は、総合学術センター（響流館）の完成に伴い制度上も図書館・博物館・総合研究室との役割分担や連携が求められることである。特に、本学所蔵資料の紹介・公開に関しては、図書館・博物館との緊密な連携の中、ウェブページ上での公開を中心に考えるべきであろう。三番目は、学外の研究者や研究機関との共同研究の拠点としての機能を強化するために、従来の直接交流に加えてインターネット上での共同研究が可能なように、学内LANの中に基礎資料や研究用ツールなどを整備すべきであろう。これは学内の教育・研究にとっても必要なものである。

2003(平成15)年度「指定研究」研究組織一覧

研究班	研究名	研究課題および研究組織	
真宗学事研究 チーフ　神戸　和麿	清沢満之研究	研究課題	『清沢満之全集』の編纂と思想研究
		研究員	神戸　和麿（キャップ：教授・真宗学）
			延塚　知道（教授・真宗学）
			沙加戸　弘（教授・国文学）
			加来　雄之（助教授・真宗学）
			一楽　　真（助教授・真宗学）
		嘱託研究員	久木　幸男（横浜国立大学名誉教授）
			今村　仁司（東京経済大学教授）
			清沢　聡之（清沢満之自坊西方寺住職）
			寺川　俊昭（名誉教授・真宗学）
			小野　蓮明（特別任用教授・真宗学）
		研究補助員	西本　祐摂（博士後期課程第３学年）
			冨岡　量秀（博士後期課程第２学年）
			日野　圭悟（博士後期課程第２学年）
			義盛　幸規（博士後期課程第２学年）
	真宗学事史研究	研究課題	真宗学事史関係資料の整理と公開
		研究員	安冨　信哉（キャップ・教授・真宗学）
			東舘　紹見（専任講師・日本史学）
			平野　寿則（専任講師・日本史学）
		嘱託研究員	福島　栄寿（真宗大谷派教学研究所研究員）
			江上　琢成（本学非常勤講師）
			安藤　　弥（本学任期制助手）
		研究補助員	加藤　基樹（博士後期課程第３学年）
			森　　剛史（博士後期課程第１学年）
国際仏教研究 チーフ　Robert F. Rhodes	国際真宗学研究	研究課題	近代教学思想研究
		研究員	Robert F. Rhodes（キャップ：助教授・仏教学）
			渡辺　啓真（助教授・倫理学）
			木越　　康（助教授・真宗学）
			井上　尚実（専任講師・真宗学）
		嘱託研究員	羽田　信生（毎田周一センター所長）
			Jan Van Bragt（南山大学名誉教授）
			Mark L. Blum（ニューヨーク州立大学助教授）
			Paul Watt（デポー大学教授）
		研究補助員	伊東　恵深（博士後期課程第３学年）
			斉藤　　研（博士後期課程第１学年）
	仏教・他宗教比較研究	研究課題	仏教とキリスト教の比較研究ならびに『教行信証』の独訳
		研究員	門脇　　健（キャップ・教授・宗教学）
			宮下　晴輝（教授・仏教学）
			Albrecht Decke-Cornill（教授・ドイツ文学）
			木越　　康（助教授・真宗学）
			村山　保史（専任講師・西洋哲学）
		嘱託研究員	寺川　俊昭（名誉教授・真宗学）
			箕浦　恵了（名誉教授・西洋哲学）
			大河内了義（本学非常勤講師・ドイツ文学）
			小川　直人（本学非常勤講師）
			藤枝　　真（近畿大学非常勤講師）
		研究補助員	岡本　敦之（博士後期課程第３学年）
仏教文献研究 チーフ　木村　宣彰	西蔵語文献研究	研究課題	北京版西蔵大蔵経総目録のデジタル化
		研究員	福田　洋一（キャップ・助教授・仏教学）
			白館　戒雲（教授・仏教学）
			三宅伸一郎（専任講師・チベット学）
		嘱託研究員	Steven Hartwell（Multiscript Solutions International, Paris, France）
			野村正次郎（本学研修員）
		研究補助員	中島小乃美（博士後期課程第３学年）
			都　　真雄（博士後期課程第２学年）

研究班	研究名	研究課題および研究組織	
仏教文献研究 チーフ　木村　宣彰	パーリ語文献研究	研究課題	大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsa jātaka の校訂・翻訳
		研究員	吉元　信行（キャップ・教授・仏教学）
			荒牧　典俊（特任教授・仏教学）
			山本　和彦（専任講師・仏教学）
		嘱託研究員	田辺　和子（東方研究会研究員）
			畝部　俊也（名古屋大学大学院助教授）
			Peter Skilling（Curator, Flagile Palm Leaves, PTS）
			長崎　法潤（名誉教授・仏教学）
		研究補助員	舟橋　智哉（博士後期課程満期退学）
			清水　洋平（博士後期課程満期退学）
	漢訳文献研究	研究課題	大谷大学所蔵稀覯漢文仏教典籍の調査と公開
		研究員	木村　宣彰（キャップ・教授・仏教学）
			一色　順心（教授・仏教学）
			織田　顕祐（助教授・仏教学・研究所主事）
			山野　俊郎（助教授・仏教学）
		嘱託研究員	梶浦　晋（京都大学人文科学研究所助手）
			釆睪　晃（本学非常勤講師）
			藤谷　昌紀（本学任期制助手）
現代思想研究 チーフ　草野　顕之	大谷大学DB研究	研究課題	大谷大学におけるデータベースの基礎構築
		研究員	草野　顕之（キャップ・教授・日本史学）
			片岡　裕（教授・情報工学）
			松川　節（専任講師・人文情報学）
			山本　貴子（専任講師・図書館情報学）
			柴田みゆき（専任講師・コミュニケーション論）
		嘱託研究員	赤尾　栄慶（京都国立博物館主任研究員・博物館学）
			箕浦　暁雄（本学任期制助手）
		研究補助員	有松　志保（博士後期課程第2学年）

2003(平成15)年度「指定研究」研究目的紹介

真宗学事研究

清沢満之研究
—『清沢満之全集』の編纂と思想研究—

キャップ・教授　神戸　和麿
(真宗学)

本研究は2002年度から『清沢満之全集』を岩波書店より刊行を開始した。今回の全集は清沢の著作をテーマ別に分け、全9巻をもって構成した。すなわち、第1巻「宗教哲学」、第2巻「他力門哲学」、第3巻「哲学論集」、第4巻「哲学史研究」、第5巻「西洋哲学史講義」、第6巻「精神主義」、第7巻「仏教の革新」、第8巻「信念の歩み—日記—」、第9巻「信念の交流—書簡—」である。これによって清沢の思想的課題がより明確となることを目指した。また編集方針は依拠本をできるだけ忠実に移すことに努め、清沢研究の定本となるものを目指している。

本年度は昨年度に引き続き、『清沢満之全集』の刊行を主目的とする。2002年度には全9巻のうち第5巻までを刊行したが、2003年度は第6巻から第9巻までの4冊を毎月1巻のペースで刊行していく。また全9巻の点検をし、問題点を集約することも併せて行っていく。

全巻刊行終了後は、全集の編集作業の中で見えてきた課題についてまとめ、今後の研究に資する準備をしていく必要がある。具体的には以下の諸点について研究を継続して進めていく予定である。

①清沢の講義の筆録の整理検討（宗教哲学講義など）
②清沢の受講ノートの整理検討（帝国大学時代のノートなど）
③清沢の自筆資料の調査収集（自筆原稿未確認のものや新たな書簡など）
④清沢の論文掲載誌の調査収集（原本未確認のものなど）

また、佐々木月樵や曽我量深、関根仁応ら清沢と交流のあった人々が遺した資料についても調査および整理をしなければならない。それによって清沢の生涯と思想を窺い知るとともに、清沢の果たした仕事が後の人々にどのように受け継がれていったのかを尋ねることにもつながると思われる。

更に、本全集は清沢研究の基礎資料となるものであるが、一般にも読みやすい形の清沢文集も待たれているところである。これらの課題についても応えていく必要があり、どのような文集が考えられるかを含めて課題を整理していく予定である。

真宗学事研究

真宗学事史研究
—真宗学事史関係資料の整理と公開—

キャップ・教授　安冨　信哉
(真宗学)

本研究は、本学における学の方向性の指標となる真宗の学事三百余年の歩みを確かめ、これを前近代史・近代史の中に適確に位置づけてゆくことを目的とする。本年度は、その達成に資するため、以下に述べる2点を具体的な研究課題としてゆく。

①真宗学事関係史料の整理

本研究班は、昨年度の発足以来、本研究所の学事関係の研究班によって収集されてきた種々の史料を、上記の研究目的にのっとり、かつこれまでの本学における学事史研究の歩みを確認しつつ、分類・整理してきた。本年度もこれを継続し、史料の内容検討・分類・位置づけと保存につとめてゆく。

②真宗学事関係史料の公開

(1)『大谷大学百年史　資料編　付録—「学徒出陣」・「勤労報国」体験資料集—』の刊行：本資料集は、『大谷大学百年史　通史編』執筆時に、第二次世界大戦当時在学していた卒業生に回答を依頼したアンケートをもととし、戦時中の大学生活や学事の実態について多くの事実、およびそれらに対する在学生の心情をも知り得る貴重な内容をもつ。史料の性格上、事実関係の確認や表記法の統一等に予想以上の時間を要したが、4月現在、アンケートの本文についてはデータ化を完了している。これに解題・年表等を付し、できるだけ早い時期に刊行する。

(2)真宗学事関係の重要史料刊行に向けての基礎的研

究：上記①の過程で、本研究として刊行すべき史料が見出された場合、具体的な作業に入ることも視野に入れる。

(3)真宗学事関係史料の収集・保存・研究・公開のあり方に関する調査と検討：本学として真宗学事関係史料を整理・公開してゆくには如何なるあり方がふさわしいか、調査・検討に着手する。本年度は、特に他大学における史料室等の現状について調査を行うこととしたい。また、本学の現状に鑑み、可能かつふさわしい史料の公開のあり方についても検討し、可能な方途については具体的な作業を開始したい。

国際仏教研究

国際真宗学研究
—近代教学思想研究—

キャップ・助教授　Robert F. Rhodes
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教研究の動向を把握すると共に、真宗を中心とした浄土教思想を国際社会に紹介することを目的としている。この目的を達成するためこれまで本研究班では、

①海外仏教関係出版物の収集
②国際的視野に立った真宗に関する研究会の開催や仏教（宗教）関係国際学会への研究員の派遣
③大谷派における代表的近代教学者の著作や論文の英語への翻訳作業を進めてきた。

本年度の目的

①出版物の収集に関しては、昨年度は真宗総合研究所移転にともなう書籍の整理作業などにより、活動が若干滞っている。本年度はこれまで継続的に行ってきた収集作業を再開することはもちろん、さらに「『教行信証』の独訳研究班」と協力しながら、英語以外のヨーロッパ言語に関する仏教書の収集にも力を入れていきたいと考えている。またこれに関しては、特にキリスト教との対話研究において必要であると思われる同教に関する基本的文献についても、その収集を検討していきたいと思う。
②前回は本学を会場にして開催された国際真宗学会が、本年度はアメリカ、カリフォルニア大学バークレー校を会場として開催される。本研究会としては同学会へ研究員を派遣し国際的学術交流を図ると共に、さらに注目される仏教関係国際学会にも積極的に研究員を派遣していきたい。
③翻訳作業については昨年度までに清沢満之・曽我量深・金子大栄・安田理深の代表的論文の翻訳を終え、現在はアメリカの出版社との出版交渉に入っている。本年度はその交渉の結果を受け「近代教学」および四名の教学者についての英語による解説論文を作成し、出版事業を完成させることを目的として活動していきたい。また、後期にはこの解説作成の成果を受け、翻訳者を中心とした「近代教学」を巡っての研究会を学内で開催する予定である。9月末から10月末にかけて数回の研究会と公開講演会を重ねながら、大谷派における「近代教学」を社会に公開していく意義について、国際的視野の中から確認していきたい。

以上、主に3つの視点から仏教を中心とした国際的学術交流を進めていきたいと思う。

国際仏教研究

仏教・他宗教比較研究
—仏教とキリスト教の比較研究ならびに『教行信証』の独訳—

キャップ・教授　門脇　健
(宗教学)

近年国際社会では、仏教における浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心が高まりつつある。このような状況を受けて、浄土真宗を中心とする仏教が国際社会のなかでもちうる意味を、キリスト教を中心とする他宗教との比較を通じて把握することが本研究の目的である。

このような目的を果たすためには、浄土真宗とキリスト教における国際的な交流作業が不可欠であろう。具体的には、①従来必ずしも十分とは言えなかった、親鸞を中心とする真宗関係文献のヨーロッパ語への翻訳作業、②研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供が必要となろう。

これまでの活動について言えば、①に関しては、『唯信鈔文意』〔*Yuishinshō-Mon'i*（*Erläuterungen zu Yuishinshō*）, Otani Universität, 1999〕に引き続き、2001年

度から、親鸞の主著である『教行信証』の独訳に着手し、2002年度に、いわゆる三つの序（「総序」「別序」「後序」）の翻訳を終了した。②に関しては、1999年度には、ドイツのマールブルク大学で開催された「第三回ルードルフ・オットー・シンポジウム」（第一回、大谷大学・マールブルク大学学術交流）においてシンポジウムを行い、その記録をドイツと日本で公表した〔*Buddhismus und Christentum—Jodo Shinshu und Evangelische Theologie—*（EB-Verlag, 2000）、『仏教とキリスト教の対話—浄土真宗と福音主義神学—』（法蔵館、2000年）〕。続いて2000年度には、マールブルク大学からマイケル・パイ、ハンス＝マルティン・バールト、ゲルハルト・マルセル・マルティンといった三名の福音主義神学および宗教学の研究者を大谷大学へ招き、研究会を重ねた（第二回、大谷大学・マールブルク大学学術交流）。また、2002年度には、第三回の学術交流へ向けた準備作業の一環として、ハンス＝マルティン・バールト氏を再び大谷大学へ招き、公開講演会およびコロキウムを行った。

さらに今後の活動計画について言えば、①に関しては、『教行信証』の三つの序の独訳を完了したことを一つの区切りとして、今後、どのような文献——『教行信証』本文の独訳を含め——を、どのような方法で翻訳すべきかの再検討を行う。そのために、研究員以外の有識者からの見解を聞く機会等も設けたい。②に関しては、第三回の大谷大学・マールブルク大学の学術交流作業（「世俗化の挑戦に直面する仏教とキリスト教」）を、4月29日から5月4日にかけてマールブルク大学で開催する。その後、2000年度に開催された第二回の学術交流の記録を早急に公表し、引き続き、第三回の学術交流の記録を年度内にまとめ上げる。また、この作業と並行して、今後どのような交流作業・対話が可能かの再検討作業も行いたい。

仏教文献研究

西蔵語文献研究 —北京版西蔵大蔵経総目録のデジタル化—

キャップ・助教授　福田　洋一
（仏教学）

本研究課題は、本学所蔵のチベット語文献を整理・研究するとともに、貴重な文献を内外に紹介することを目的としている。本年度はこの研究目的を実現すべく、次の諸項目の研究計画を立てている。

1．北京版西蔵大蔵経総目録の電子化

昨年度は、通番号、書名、函号、ページ数、対応するデルゲ版、ナルタン版、金写のテキスト番号等についてのデータ構築が終了、オンライン検索できるようにした。今年度は、既入力の著者名、翻訳者名のデータに校正を施し、Web上での公開をめざす。なお、校正作業と平行してコロフォンの読解を行い、『勘同目録』の記述に対する再検討をはかる。以上の結果に基づき、オンライン検索のデータをアップデートする。

2．TLKのアップデート

当研究班で開発したMacintosh用のチベット語システム“Tibetan Language kit”をMac OS Xに対応させるため、1）Unicode化（これにより、Web上での表示や、Windowsとのデータ交換が容易となる）、2）フォントの作成、3）キーボードの作成を行う。年度内にTibetan Language KitのMac OS X対応版をリリースする。

3．稀覯チベット語文献の研究

本学所蔵の稀覯チベット語文献のうちゲイェ・ツルティムセンゲ（dGe ye Tshul khrims seng ge）『インド・チベット仏教史（rGya bod kyi chos' byung rin po che）』（蔵外11847）の公開をめざし、入力済みデータに対する校正作業および、本テキストとほぼ同時期の著作である『青冊（Deb ther sngon po）』など他チベット歴史文献との比較研究を行う。

4．Webページの充実

本研究課題では、すでにWebページを開設(http://www.otani.ac.jp/cri/twrp/)しているが、日本語ページのみである。広く国外に成果を公開するために、英語版ページの作成に取り組む。これに平行してコンテンツの充実もはかる。

5．チベット語文献輪読会の開催

本研究課題の研究員が中心となり、内外の若手チベット研究者を集め、チベット語文献の講読会を開催する。今年度は仏教系と歴史系に分かれ、「ドゥラ書」および『カダム仏教史』などを講読する。

仏教文献研究

パーリ語文献研究
—「大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātakaの校訂・翻訳」—

キャップ・教授　吉元　信行
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館所蔵の東南アジア地域所伝の膨大な南方仏教貝葉写本(以下、〈大谷貝葉〉)の中で、特に稀覯写本と思われる一連の『パンニャーサ・ジャータカ』(Paññāsajātaka、50ジャータカ)と言われるパーリ語文献群の体系的、文献学的研究である。

この50のジャータカのうち、〈大谷貝葉〉には、タイ所伝の26種類のジャータカが収められているが、すでに本研究所共同研究と文部省科研とによって、そのうちの9ジャータカをローマナイズし、田辺和子博士将来のバンコク国立図書館所蔵のマイクロフィルムと校合した"transliteration"のエディションを完成させ、その一部の翻訳研究を行った。

当該研究では、その継続研究として、研究員・嘱託研究員、研究補助員、研究協力者の協力を得て、まだ着手していなかった17ジャータカのローマナイズおよび異写本との照合をほぼ完成し、そのうちの一部の校訂・翻訳を昨年度までに行ってきた。

本年度は、新たに入手した(昨年度の現地調査による)バンコック市内ワット・ポー寺院所蔵の同ジャータカの貝葉写本を参照しながら、全26種類のエディションを完成し、あわせて、一部ジャータカの厳密な校訂および翻訳研究を行い、学界に公開することによって、本学図書館所蔵『パンニャーサ・ジャータカ』の全貌を明らかにする予定である。

なお、本年度は新たに嘱託研究員として、東南アジア貝葉写本研究の世界的権威Peter Skilling氏(バンコック在住)を招聘し、上記作業に当たっての指導・助言を得ることになった。

本研究によって、現在のところほんの一部分しか学界に知られていないタイ所伝の『パンニャーサ・ジャータカ』のおよそ半分が、世界で初めて学界に公開されることになり、その意味でも、〈大谷貝葉〉の資料的価値が明らかになり、学界を益すること計り知れないものがあろう。

仏教文献研究

漢訳文献研究
—大谷大学所蔵稀覯漢文仏教典籍の調査と公開—

キャップ・教授　木村　宣彰
(仏教学)

本学は、寛文2年(1665)に学寮が創設されてより、一貫して仏教の研究と公開を使命としてきた。そして三百数十年にわたる長い歴史をとおして仏教文献を中心に多くの典籍を収集してきた。その結果、本学は膨大な量の和漢文献を所蔵している。本研究は本学所蔵の稀覯漢文仏教文献の調査を行い、その中でもとくに重要なものを選んで研究し刊行公開していくことを目的とする。これに加えて、従来対外的な役割を担ってきた「大蔵経学術用語研究」についても、これまでの経過を踏まえながら、継続的に引き継いでゆかねばならないと考えている。

これまで本研究では、本学図書館の『和漢書分類目録』や大正大蔵経の『昭和法宝総目録』などを利用して、本学所蔵の稀覯漢文仏教文献の全般的な調査を行い、その概要把握に努めてきた。そして、それを踏まえて、稀覯文献を刊行公開していくための基本的な方針を検討してきた。そのような作業のなかで見出された典籍の一例として、鎌倉初期の法相宗の学僧解脱房貞慶が撰述した『法華開示抄』がある。本学図書館には稀覯典籍と思われるその4種の写本が所蔵されており、それらの写本に

ついて、当面の作業上必要な箇所のコピーをそれぞれ既に作成ずみである。そこで今年度は、大正大蔵経所収の『法華開示抄』を底本とし、本学所蔵の4種の写本を対校本として校訂作業を行いながら、本書の解読・研究を進めていく。

日本では夙に聖徳太子が『法華義疏』を著し、法華経の一乗思想を讃仰してより、平安、鎌倉時代を通して一乗の教説は広く人々の心に浸透した。それに対して、法相宗では五姓各別を宗義とし一乗説を方便と見なす。そのような状況のなかで、貞慶は法相宗の祖師慈恩大師窺基の『法華経玄賛』を根本として『法華開示抄』を撰述し、一乗方便・三乗真実の説を唱え、自宗の正当性を確保しようとしたのである。また本書には数多くの佚書からの引用文が豊富に見られ、この点においても本書は貴重な資料であるといえる。厳密な校訂作業や解読研究を経て、本書のより真正なテキストが刊行公開されれば、それは大いに学界を裨益することになるであろう。

現代思想研究

大谷大学DB研究
—大谷大学におけるDBの基礎構築—

キャップ・教授　草野　顕之
（日本仏教史学）

2001年10月、大谷大学近代化100周年の記念すべき年に、大谷大学は総合施設「響流館」を立ち上げ、広く世界に向けて新たな情報発信を始めた。いまや、これまでの大谷大学の貴重な学的資産を、劇的に発展するデジタル化の世界に対応させて活用できるようなデータベースを構築することが、本学の使命となっている。しかしながら、これまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられているものの、全学的な視野をもってデータベースを構築することはなされて来ていない。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行なう。

課題となるさまざまなデータベース構築については各研究員が分担して行なう。また、全学的な取り組みが必要と思われるので、本研究員、嘱託研究員はもちろん、さらには学内外の協力者を得て「大谷大学データベース構築に向けての研究会」を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有するとともに、研究成果を発信していきたい。

2003年度は昨年度の成果をふまえ、本年度も学内の諸機関（とくに図書館）、研究所の諸研究班と協力体制を組みながらデータベース構築を推し進めていく。あわせて研究所のホームページをもちいたデータベース公開も行なう。本年度内に行なう主なデータベース構築は以下のとおり。

1　大谷大学図書館所蔵『北京版チベット大蔵経』及びチベット語蔵外文献のデジタル画像データベース化
2　清沢満之自室原稿のデジタル画像データベース化
3　大谷大学図書館所蔵北里蝋管資料のデジタル音声データベース化
4　大谷大学所蔵標本（古印・封泥など）の擬似動画像による立体化とデジタル画像データベース化
5　大谷大学図書館所蔵貴重図書の目録作成
6　親鸞の真蹟などの重要な文献のデジタル画像データベース化
7　その他

2003(平成15)年4月1日

2003(平成15)年度「一般研究」選考結果発表

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
一色　順心	研究課題　「『十門弁惑論』の研究」 研　究　員　一色　順心（教授） 大内　文雄（教授） 織田　顕祐（助教授） 嘱託研究員　米田　健志（本学研修員） 長谷川　慎（本学非常勤講師） 釆睪　晃（本学非常勤講師）	200万円
桂華　淳祥	研究課題　「石刻史料から見た近世中国仏教の社会史的変遷に関する基礎研究」 研　究　員　桂華　淳祥（助教授） 松川　節（専任講師） 嘱託研究員　西尾　賢隆（花園大学教授） 藤原　崇人（本学任期制助手）	200万円
友田　孝興	研究課題　「レッシングの戯曲と宗教的啓蒙精神の研究」 研　究　員　友田　孝興（教授） 吉田　孝夫（専任講師） 芦津かおり（専任講師）	200万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
赤瀬　知子	研究課題　「中世から近世にかけての名所歌集の研究」 研　究　員　赤瀬　知子（助教授）	100万円
一郷　正道	研究課題　「カマラシーラ著『中観の光』の和訳研究とそのcritical textの製作」 研　究　員　一郷　正道（教授）	100万円
米本　義孝	研究課題　「ビートルズの研究」 研　究　員　米本　義孝（教授）	100万円

2003(平成15)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

『十門弁惑論』の研究

研究代表者　一色　順心
(仏教学)

『十門弁惑論』3巻は、大慈恩寺の復礼が太子文学権無二の質問に応えて表わした護教論文である。復礼はその生卒年を明らかにしないが、諸経録の記述によって武周期の人であることが確認できる。武周期は実叉難陀や菩提流志などの外来三蔵も多く来朝し、新しい経典が紹介された時期でもある。

そのような革新的な時代の中で仏教者たちは何を課題とし、仏教をどのように理解していったのだろうか。こうした問題を考えようとするとき、『十門弁惑論』は、実に様々な問題を提起するのである。第1には復礼が武周期の経典翻訳のほぼ中心にいたということを挙げなければならない。この点は法蔵や慧沼らと共通する点であり、彼らが華厳宗や法相宗の教学の展開に果たした役割を鑑るとき、改めて復礼との関係が注目されるのである。第2に特に法蔵との関係でいえば、復礼が『華厳経』や『大乗起信論』を学んでいたことも知られるし、法蔵と教学上の論争があったことを記す資料も存在しており、法蔵の華厳教学に与えた影響が注目されるのである。第3に復礼が著した「真妄頌」は後代の澄観や宗密に大きな影響を与えており、この点からも復礼の教学の思想的意義が注目されるのである。

以上のような位置にある復礼の思想を明らかにするために、唯一現存する復礼の著作である『十門弁惑論』を解読研究するのが本研究の目的である。

2002（平成14）年度に、本研究所「一般研究」（共同研究）の採択を受け、現在、テキストの前半部分を解読中である。『十門弁惑論』の註釈書に臥雲撰『纂述』2巻などがあり、それらの資料も視野に入れて研究しているため、テキストの全体を把握するには、なお時間を要することとなる。したがって、本年度も本研究を継続していきたい。

共同研究

石刻史料から見た近世中国仏教の社会史的変遷に関する基礎研究

研究代表者　桂華　淳祥
(東洋史学)

中国の近世、とりわけ宋・元代における仏教と社会との関わりの歴史的変遷について、中国史の視点に加え、遼・金・元といった異民族支配体制や朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族或いは地域との関係という視点から、石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行い、当該研究課題の基礎的研究に質することを目的とする。

本研究で集中的に扱おうとするのは表題に示したように石刻史料である。従来、中国仏教史の研究には主として仏教典籍をはじめとする編纂史料が利用され、その記述によって歴史事象が跡付けられてきた。もちろんそれに対置される生の資料である石刻史料に関しても、20世紀前半には常磐大定・道端良秀両氏による現地調査及び拓本の将来があり、それらに対する検討もなされてきた。

しかし、その成果が従来の編纂史料による歴史認識を塗り替えてきたとは言い難い。このような状況下、1990年代以降、中国の経済発展とともに研究環境が改善され、個々にではあるが石刻史料が影印或いは録文という形で出版されて入手が容易になり、また現地に赴き関係の碑刻を直接検証できる機会を得ることも可能になるなど、新しい局面が開かれた。近年には、いち早くそれらの石刻史料を用いた研究がなされるなかで、研究代表者は「宋金代山西の寺院」（『大谷大学研究年報』第52集）において、現地調査によって明らかになった知見をもとに石刻史料を用い編纂史料からだけでは得られない社会の底辺の動向を跡付けて、当該時代の仏教史研究における新たな視点、すなわち「地域社会における寺院間のネットワークの存在」を提唱した。本研究は、この視点をさらに発展させ、華北を中心として各地に現存する石刻史料を徹底的に洗い出すとともに、世界各地の図書館に収蔵される石刻史料をも視野に入れつつ、今までにない史料集を作成し、さらにそれらのデジタル化・データベ

ース化を目指している。これによって、華北に限らず中国全域、さらには東アジアにおける仏教のネットワークの存在を明らかにするという新たな成果も期待できる。

以上の目的を達成するために、定期的研究会で従来の研究の蓄積を整理・再検討し、その情報をもとに中国への現地調査を行い、中国河北・山西地域に関する石刻史料についての所在状況を明らかにしたリストを作成する予定である。

共同研究

レッシングの戯曲と宗教的啓蒙精神の研究

研究代表者　友田　孝興
（ドイツ文学）

本研究は、ドイツ啓蒙主義文学の頂点に立つと同時に、後のゲーテ、シラーに多大の影響を与え、両者の活躍によって燦然と開花するドイツ近代文学に確固たる先駆的基礎付けをなしたレッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781）の宗教的啓蒙精神の世界を、彼の戯曲、芸術・文学論、宗教・人間教育論等を考察することによって、総合的に把握しようとするものである。

当時のドイツ演劇界は、フリードリッヒ大王のフランス文学偏愛の影響もあって、フランス古典劇がその世界を占拠していた。これに反感を抱いたレッシングは、『ハンブルク演劇論 Hamburgische Dramaturgie』や『文学書簡 Literaturbriefe』等をとおして、戯曲の本質とその上演の場としての真の国民劇場の必要性を訴えていくことになる。つまりそれらの論説において彼は、本来の戯曲は国民の生活に根ざしたものでなければならないこと、悲劇について言えば、フランスの古典劇作家がアリストテレスの悲劇論を曲解したのであって、悲劇の筋は本質上、人物の性格から生じなければならないことを力説するとともに、「三統一」（時と場所と筋）の中で第一義的なものは筋の統一だけであって、他の二つは拘泥すべきものではないということを看破し、カタルシス（浄化）の本質についても卓見を述べている。かくしてレッシングは、模範とすべきはフランス古典劇ではなくてシェイクスピアの戯曲であるという独自の演劇論を展開し、ドイツ国民劇の新たな形成のための基礎を確立することになる。そしてこれらの演劇理論の実証が彼の戯曲に他ならない。と同時に、この戯曲をとおして、彼は形骸化した非人間的宗教性を攻撃し、人間存在の在るべき意味を問い求めるのである。かくして彼の戯曲はドイツの精神史の上にも大きな足跡を残すことになる。

レッシングの主たる戯曲は、『ミス・サラ・サンプソン Miss Sara Sampson』、『ミンナ・フォン・バルンヘルム Minna von Barnhelm』、『エミーリア・ガロッティ Emilia Galotti』、『賢者ナータン Nathan der Weise』であるが、本年度は啓蒙主義精神の最高の詩的表現としての戯曲『賢者ナータン』を考察することから出発する。というのは、利己的な民族と宗教に起因する争いを、いかにすれば理性的な解決へと導くことが出来るかという現代的課題に応えるのがこの作品だからである。レッシングは当時、「スピノザは無神論者である」とする偏見に満ちたキリスト教「正当派」に対し論争をいどむ。しかしこの行為が国教への干渉だということで、レッシングに論争禁止命令がブラウンシュヴァイク大公より下る。そこで彼は戯曲を通して自己の信念を詩的に表明する。それが『賢者ナータン』なのである。従ってこの作品には彼の普遍的人類愛に満ちた宗教的啓蒙精神が総合的に記されている。それ故に、この作品を中心にしながら、これまでのレッシング研究に欠けていた文学・宗教・哲学・演劇等の綜合を試み、より正確なレッシング像を把握することが本研究の目的である。

個人研究

「中世から近世にかけての名所歌集の研究」

研究代表者　赤瀬　知子
（国文学）

名所すなわち歌枕とは、原義はともかく、平安時代以降、歌に詠まれた地名の意味として主に理解されてきたが、加えて詠まれた歌が有名になることにより、その地名にあるイメージが付与されるようになったものをいう。たとえば、「吉野」といえば「桜」、「須磨」といえば「海人（あま）」「炭焼衣」というように、一つの歌枕に一つないし二、三の景物がセットとなり、その歌枕のイメージを形成し、またそれが継承された。今回研究

の対象とする時期は、従来の歌枕研究において考察されることが少なかった南北朝時代から江戸時代初期にかけてである。大局的にはその時期の歌枕の趨勢に目を配りつつ、本年度は特に『類字名所和歌集抜書』（寛永八年刊）に焦点をしぼり、諸本の問題、他の名所歌集との関係などを明らかにしたい。

現在知られている該書の伝本は、写本３点、版本21点の、計24点である。これらのうち、すでに複写物を入手済みのもの15点、架蔵本１点、個人蔵で入手不可能なもの２点を除く、計６点の複写物を今回の研究で入手したい。６点のうち１点は、長野県立長野図書館丸山文庫蔵本で、撮影に出かける必要がある。そうした過程を経て、諸本をほぼ収集しおえた段階で本文の詳細な比較検討を行い、諸本を分類したい。

また、諸本論にとどまらず、可能なかぎり内容検討も行いたい。そもそも『類字名所和歌集抜書』は名前の示す通り、連歌師里村昌啄の編として名高い『類字名所和歌集』からの抄出本である。両者にどのような差違があるのか、また、なぜそうした差違が生じたのかを、両者をつき合わせながら丁寧に考察していきたい。さらに、なぜ『類字名所和歌集抜書』のような抄出本が必要とされたのかという点についても考えてみたい。私見によれば、十七世紀中頃が名所・歌枕の一つの大きな転換期であるように思う。まさにその時代に成立した『類字名所和歌集抜書』が、時代の要請にどう応えているのか、といったことにも言及できればと思っている。また、『類字名所和歌集』のみならず、他の名所歌集との関連についてもできるだけ考察を進めたいと考えている。『類字名所和歌集』の影に隠れ、従来ほとんど光を浴びてこなかった『類字名所和歌集抜書』を考察することで、近世初期の名所・歌枕について、新しい展望が少しは開けるのではないかというのが、今回の研究のねらいである。

個人研究

カマラシーラ著『中観の光』の和訳研究とその critical text の製作

研究代表者　一郷　正道
（仏教学）

カマラシーラの著作『中観の光』は、主著とみなされていながら、これへの研究はすすんでいない。その理由は、大部（北京版で一三二葉）であり、梵語原典がなく、漢訳もなく、チベット語訳しか残っていないという状況にある。さらに、本書に対する注釈書としては、モンゴル人学者タン・ダルの『中観の光覚え書き』しかなく、それは未完にして不完全なものである、という事情もその要因である。

本書は、インド後期仏教思想を解明するには、喫緊の研究課題の文献である。とりわけ、ジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタによって体系化されてきた「瑜伽行中観派」の思想をより解明するには、シャーンタラクシタの高弟であるカマラシーラの上記主著の研究を是非成就せねばならない。カマラシーラは、本書で、認識論、存在論、仏教論理学を駆使して当時の仏教および非仏教諸学派との対論を行い、二諦説、「不生」を論じ、自己の立場である「一切法無自性・空」という中観思想を宣揚する。

当該の研究代表者は、これまで上記文献の和訳研究を続け、全体の約三分の一の讀解をおえ、公表してきた。そして残余の和訳研究の見通しもついてきた。

そこで、今、並行してなすべきこととして、上記文献のクリティカルエディションの出版が、世界の学界からの要請事項としてある。本来ならば和訳研究を終了してからやるべきであるかもしれないが、一部にしろ、研究成果の公表は、学界に稗益することになろう。幸い、コンピューター技術の進歩により、チベット語をローマナイズせずに印刷することが可能になっている。

次のごとき作業手順を経て仕事をすすめる。

1．ACIP のデルゲ版を底本に、北京、チョーネ、ナルタン各版を校訂する。
2．これまでの解読成果にもとずき、科文分けを行い、小見出しをつけ、本書の内容がわかるようにする。
3．引用文献を渉猟し、その原典にあたり、原文をテキ

ストへ入れる。

このようにして、申請者作成のシノプシスの第Ⅱまでの完成をめざす。

個人研究

ビートルズの研究

研究代表者　米本　義孝
(英文学)

学術雑誌『英語青年』(研究社)の1978年8月号と9月号に拙稿「ビートルズの詩の世界」を発表した。当時、彼らが解散して8年しか経ってなかったこともあって、ビートルズの作品そのものの研究は皆無であった。わたしは、彼らの作詞作曲した188編の作品を分析して、現代詩のひとつという観点で論述した。あれから20年以上経ち、『読解「ユリシーズ」上』(1996年1月、研究社)と『言葉の芸術家ジェイムズ・ジョイス―「ダブリンの人びと」研究』(2003年3月、南雲堂)を完成したこともあって、念願のビートルズ研究を再開し、今度はメロディの方を主にして研究することに一年以上専念したい。未だ研究されていないが、彼らの作品はリバプール独自の文化とイングランド全般の文化との葛藤と融合だとわたしはずっと思ってきた。そこでリバプールへ行き、そこの土地に接し、リバプール文化に関する書物を購入したり、資料収集として図書館通いをしたい。

ビートルズに関する書物を1978年までで100冊以上読破し、そのほとんどは彼ら個人と演奏の仕方についてとであった。それ以後もビートルズに関する書物をほそぼそと購入してきたが、さらに今回研究に必要と思われる英米さらに日本で発売されたビートルズ本50冊ほどを厳選して購入して読破したい。また、彼らが曲作りするのに影響をうけたクラシック、ロック、ジャズ、フォーク、インド音楽などを入念に調べるため、そのCDを買い揃えたい。

研究テーマとしては―1．ビートルズサウンドの特色　2．メロディと歌詞の融合　3．創作過程における変化と発展　4．リバプール文化とイングランド文化の葛藤　5．ジョン・レノンとポール・マッカトニーの対比(音楽に対する相違、レノンの政治志向対マッカトニーのカトリック志向など)　6．1960年代の産物である彼らの作品が時代と場所を超えて普遍化した軌跡　7．作詞に影響をあたえた英米詩、メロディ作りに影響をあたえたクラシック、ロック、ジャズ、バラッド、ミュージックホール曲　8．7の逆で、以後の音楽と文化に彼らが与えた影響―を考えている。ビートルズの解散後30年以上経った現在でも、日本では、メロディと歌詞の両方から「作品の芸術性を論じた研究書」は私の知るかぎり一冊も出版されていない。したがって、新書版にして『ビートルズ』を出版することを念頭において論述したい。

2001(平成13)年度「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

大谷大学近代史研究
—『大谷大学近代100年のあゆみ』の編纂—

キャップ・教授　延塚　知道
(真宗学)

大谷大学は1901年の清沢満之による東京の真宗大学開学から数えて100周年という記念すべき歳を迎える。本研究はこのたびの大谷大学近代化100周年を記念して『大谷大学百年史』を発刊することを第一の目的として研究を進めてきた。

本研究班では、ここ数年来、日本近代における本学の歩みを確かめるべく、さまざまな資料の収集と整理を行ってきたが、その作業を踏まえて本2001年10月13日の開学記念日に『大谷大学百年史』を発刊することに全力を注いだ。通史編と資料編の二冊について編集作業を並行して進めたが、通史編については昨年度の時点で学内の教員に土台となる原稿の作成を依頼した（詳細については2000年度経過報告参照)。そこで提出された原稿を元に、検討と整理を加えて入稿原稿を作成した。この作業には週に三日間、各四時間ほどの時間を費やし、五月下旬にはほぼすべてを入稿した。

通史編は真宗大学として東京巣鴨に開校されてから100周年を迎えるにあたって、その歩みを確かめることに主眼を置いた。その際、基本としたのは、1997年に出版された図録『大谷大学　近代百年のあゆみ』である。図録の史観によりながら、全体をⅠ東京開学までのあゆみ、Ⅱ開学—浄土真宗の学場、Ⅲ「大谷大学」の名のり、Ⅳ激動の時代、Ⅴ「戦後」新制大学、Ⅵ真宗の公開—大谷大学の使命、の6期に分けた。また、図録に依りながら、かなりの数の写真や図版を掲載した。さらに、巻末には80頁にわたる年表を付した。大谷大学の歴史を通観できる読み物となったと思われる。

一方、資料編は条規学則を中心としており、大学の変遷を制度の上からうかがうことができるようにしたものである。大谷大学学事研究班によってすでに発刊されていた『条規学則集』を基本に据え、資料を補填する形で原稿を作成していった。また、大学論説集として、諸先輩方の大学論を収録した。これも通読することにより、それぞれの時代の中で大学が抱えていた課題と、仏教の大学としての大谷大学の意義を窺い知ることができるように努めた。さらに現在までに至る大学の図面集や諸資料も付した。これらの作業にも多くの時間を要したが、六月末までのほとんどを費やして入稿にこぎつけた。

校正作業は通史編については八月末まで、資料編については九月中旬までかかったが、開学記念式典までには2冊とも発刊することができた。通史編は年表を含めて本文684頁、資料編は本文734頁である。

100年史の発刊を終えた10月以降は、これまでにも作業を進めてきた未整理資料の整理に当たった。特に2002年4月からの真宗総合研究所の響流館への移転に伴い、図書館に戻すべき資料と研究所に設置する資料の分類を行った。また、学事研究班以来の図書や蓄積してきた資料も膨大なものとなっており、改めて分類整理する必要があり、その作業にも当たった。

100年史が一応発刊できたことで、本研究は一段落ついたと見ることができるかもしれない。しかしながら、本研究班のそもそもの始まりが1665年の学寮草創期からの研究にあったことは忘れてはならない。その意味では本学の340年の歴史を通観するための作業がいよいよ始まったとも言えよう。

また、今回の100年史を作成する過程で、戦時下の状況については、卒業生からのアンケート協力によって、今回初めて明らかになったところが多い。残されている資料が少ない時代、卒業生の実体験を聞くことができたことは重要で、今後何らかの形にして公にすることは大学の責務でもある。これについては次年度に引き継ぐ課題としたい。

真宗学事研究

清沢満之研究
—『清沢満之全集』『清沢満之文集』の編纂—

キャップ・教授　神戸　和麿
(真宗学)

本研究は、2001年の大谷大学近代化100周年を機縁として本学建学の原点を確認していくために、学祖・清沢満之の「全集」の編纂および「文集」の刊行を研究目的としており、本年は年度計画にそって以下の研究を推進した。

1　大谷大学編『清沢満之全集』の編纂

2001年度は本研究班にとって大きな転機となった。本研究班のもっとも重要な課題であった「清沢満之全集」を岩波書店から発刊することが決定したからである。

本研究班は、基礎資料として今日の学術的な研究に堪えうる『清沢満之全集』を編纂するための準備作業を進めてきたが、2001年10月29日の研究会において岩波書店から全集を刊行する方針が決まった。その後、編集委員会が立ち上げられ、そこで決定された方針にそって以後作業を急ピッチで進めることになった。開催した編集委員会は以下の通り。

2001年12月13日　第1回『清沢満之全集』(仮称)編集委員会
2001年12月26日　第2回『清沢満之全集』編集委員会
2002年2月13日　第3回『清沢満之全集』編集委員会

編集委員会の決定した方針に従い、本研究班では、まず全集に収録する清沢の全著作について依拠本を確定する検討作業を行った。とくに清沢の自坊である西方寺の全面的協力によって、清沢の自筆原稿を依拠本とすることができるようになった意味は大きい。その結果、全集の全体構成を見直し、テーマ別に全九巻にまとめることになった(次表参照)。

また基本的な編集方針は次のように確かめられた。本全集編集の目的は、多方面からの研究に堪えうるアカデミックな全集の作成にあり、その目的に立って依拠本をできるだけ忠実に移し、信頼性の高いテキストを提供することに努めることにある。また各巻に校注、文献ごとの解題、編集責任者による解説を付すことが決まった。

以下のような検討をうけて編集体制を整え、2002年10月に第一回配本を行い、以後毎月一巻を公刊配本していくことを目指すことになったのである。(実際には2002年11月28日が第一回配本となった。)

編集体制

編集委員代表　小川一乗
編集委員　寺川俊昭・久木幸男・今村仁司・小野蓮明・神戸和麿・安冨信哉・延塚知道・池上哲司・須藤訓任・友田孝興・沙加戸弘
編集実務担当　神戸和麿(チーフ)・加来雄之・一楽　真

『清沢満之全集』全九巻(テーマと編集担当表)

各巻名称	編集担当責任者(含解説)	編集担当
第一巻　宗教哲学	今村　仁司	宮下　晴輝 樋口　章信
第二巻　他力門哲学	安冨　信哉	山本　和彦 宮崎　健司
第三巻　哲学論集	今村　仁司	門脇　健 三木　彰円
第四巻　哲学史研究	須藤　訓任	兵藤　一夫 村山　保史
第五巻　西洋哲学史講義	池上　哲司	中川皓三郎 渡辺　啓真
第六巻　精神主義	延塚　知道	藤嶽　明信 織田　顕祐
第七巻　仏教の革新	寺川　俊昭	一色　順心 木越　康
第八巻　信念の歩み—日記	神戸　和麿	ロバート・F・ローズ 加来　雄之
第九巻　信念と交流—書簡	小野　蓮明	一楽　真 東舘　紹見

国語表記に関して　沙加戸弘
歴史事項に関して　木場明志
文献読解に関して　草野顕之
人権問題に関して　泉　恵機

2　大谷大学編『我が信念—清沢満之のことば—』の発刊

2002年10月13日に『我が信念—清沢満之のことば—』(93ページ)を刊行した。本研究班では、『清沢満之文集』

（仮称）の刊行を研究目的としておりその準備を進めていた。ただ6月ごろ、大学より開学記念日にあわせて、清沢の思想や本学見学の精神にふれることのできる小冊子を作製してほしいとの要請があり、急遽、編集に取り掛かった。今後、新入生にも配布しるということから、本書は、読みやすく簡便なものをめざした。清沢満之の宗教的信念をうかがう文章として雑誌『精神界』から「精神主義」を始めとして10編を選び、それに「真宗大学開校の辞」「御進講覚書（抜粋）」「真の朋友」の3編を加え、合計13編を収録した。また音読されることの期待と読みやすさを考慮し適宜ふりがなを付し、簡単な語注も付した。また巻尾には「清沢満之略年譜」を付した。

本研究班において研究目的としている『清沢満之文集』（仮称）、つまり本学学生に広く読まれ、本学の建学の精神や清沢の信仰・思想によって人生において宗教がもつ根本的意味にふれることができ、また学生の基礎的な研究に使える文集の刊行という課題は今後に残された。

3　そのほか

・西方寺所蔵清沢満之自筆原稿画像データベース化

昨年度に続き西方寺所蔵の清沢満之自筆原稿デジタル画像をデータベースとして活用するための整理を進めた。この研究は指定研究である「大谷大学データベース研究班」と協力して推進している。また順次、当該資料の翻刻作業にも取り掛かった。翻刻作業については、『全集』収録予定のものを最優先で行った。

・名古屋祐誓寺（住田智見自坊）において清沢満之・真宗大学寮講義筆録を調査した。住田の受講ノートには「古代哲学史」「近世哲学史」「論理学講義」「心理学講義」「宗教哲学」が残されている。ただし調査時には、『全集』に収録を予定していた「宗教哲学〔真宗大学寮明治二十四年講義〕」の現物は確認できず、同朋大学所蔵のマイクロフィルムによって翻刻作業に入った。

真宗学事研究

真宗教学研究
—『観経疏』の校訂・註釈—

キャップ・教授　小野　蓮明
（真宗学）

真宗総合研究所の改編に伴い2001年度より発足した「（プロジェクト名）真宗学事研究・（推進研究）真宗教学研究」は、1999年度、2000年度2カ年の委託研究「浄土真宗文献研究班」における研究課題を継承するものである。すなわち、浄土真宗を研究するうえで不可欠とされる聖教および親鸞の真蹟の公開に向けての資料収集と文献研究を行うことを目的とするものである。

具体的には、善導著作の五部九巻について、高田派専修寺に蔵せられる「宗祖加点本」のテキスト作成を行うことを通して、聖教編纂において不可欠とされる具体的作業手順の明確化と、その問題点の検討を行うことを主たる研究課題とする。前年度まで、検討作業について、

1．『宗祖加点本観経四帖疏』の翻刻における具体的手法の確認と問題点の抽出
2．聖教刊行に関する資料収集
3．テキスト編纂の方針について

という3つのテーマを立てて研究を進めてきており、本年度もその方針を踏襲して研究を行ってきた。

上記3点のそれぞれについて、前年度までに、作業を進めるために必要とされる基礎資料の作成および収集を主に進めてきたが、本年度はそのうち特に第1の項目に研究の主軸をおいて取り組んできた。これまでの研究を通して、『宗祖加点本観経四帖疏』の訓点を忠実に転写した第1次テキスト原稿の作成は終えている。この第1次テキスト原稿は、漢文篇、読み下し篇、注釈篇の3区分からなるテキスト化を念頭においたものであるが、毎週1回研究会を開催して、テキスト化の作業でもっとも重要な位置を占める漢文部分の転写原稿の確認と確定を『玄義分』について行うとともに、加えて、今年度はその読み下し篇について、表記、句読点の位置を中心に検討と確定へ向けた作業を行った。

当研究班が取り組んでいる『宗祖加点本観経四帖疏』のテキスト化にあたっては、影印本『親鸞聖人真蹟集成別巻・専修寺本五部九巻』（法蔵館刊）を底本として作業

を進めている。これについては、判読不明な箇所や不鮮明な箇所が存在するなど、いくつかの問題点が存在する。これらの点については、将来原本による確認が可能になれば解決の方向性を見いだすことができる問題であるといえる。しかし、編纂作業の実際において、もっとも問題となるのが、「宗祖加点本」そのものが持つ個有の性格である。

「宗祖加点本」の訓点には、返り点や送りがなが二重に付せられる箇所が少なくない。それらの箇所について、漢文篇の作成にあたっては、その形態を忠実に翻刻することによって、テキストにほぼ反映できるものもである。しかし、読み下し篇と注釈篇を作成していくうえで、それらの問題を有する箇所が底本に存在するということは、編纂方針の根本に関わる重大な意味を持ってくる。具体的にいえば、漢文に対して二重に訓点が付せられているとき、その訓点に基づく2通りの読みのうちどちらの読みを採用して、読み下し篇の本文とするのか。1つの読みを採用し、もう一つの読みを採用しないという判断を下した場合に、それを採用する根拠をどこにおくのか。この点を確定していくためには、きわめて慎重な姿勢で臨む必要がある。編纂者の判断に関わるこれらの問題は、訓点が二重に付せられた箇所だけにとどまる問題ではなく、読み下し篇の作成においては、句読点を付すという問題にもまた大きく関わってくる。底本に存在しない句読点を編纂者が付していくとき、その一々についても厳密な確認を経なければ「テキスト」としての役割を果たさなくなってしまうのである。読み下し篇の作成と確定におけるこれらの問題点は当然また、注釈篇にどのような注をおくのかという内容にも深く関わっている問題である。本年度は、それらの一々の箇所について、詳細な検討を加えながら研究を進めてきた。本年度読み下し篇作成の作業に具体的に着手するなかで直面した問題は、1999年度以来の取り組みの中で、一貫して検討してきた問題点を再確認するものでもあった。聖教編纂の具体的な作業の進展のためには、どのような目的と方針でテキストを編纂するのか、大谷大学が社会に対して公開すべきテキストとはどのようなものでなければならないのか、という編纂方針をいかに明確にするかということの確認が何よりも不可欠であるということである。この点について今後継続して研究を進めていく必要があろう。

国際仏教研究

国際真宗学研究
—近代教学思想研究　諸外国における仏教研究の動向と展開の研究—

キャップ・教授　Robert F. Rhodes
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教研究の動向を把握すると共に、国際社会に浄土教、ことに親鸞思想を広く海外に紹介していくことを目的としている。

現代の仏教研究は、欧米社会などにおいて方法論を含めて多様化しており、これらの海外における研究の動向を把握し共有することは、国際的な仏教研究を進めていく上で必要不可欠である。また、近年の国際社会において、親鸞の思想への関心が高まっており、国際社会に向けて親鸞教学やその研究の成果を発信し紹介していくことは、日本の精神文化を海外に伝えていく上で重要な意味を持つものであると思われる。

そこで本研究は、海外仏教研究成果の受信と、本学および本研究の仏教研究成果の発信とを目的とし、以下の点から研究を進めてきた。

(1)〈受　信〉
①海外における仏教研究書誌の収集。
②海外における仏教研究書誌デジタル・データベースの構築。
③海外の仏教研究者を招聘して共同研究会を開催。

(2)〈発　信〉
①近代真宗教学中の代表的論文の英語翻訳。
②キリスト教と仏教との対話研究およびその公開。

研究経過

〈受信〉に関しては、海外における仏教関係雑誌の受け入れや関係図書の収集という日常的研究作業を継続して行っている。本年は特に研究所の学内への移転を契機として、研究所図書の整理・再登録に多くの時間を費やすこととなった。

〈発信〉①については、2000年度までに終えた清沢満之・曽我量深・安田理深の代表論文の翻訳に加え、金子大栄の『真宗学序説』(文栄堂)部分訳の完成に向けた研究会を重ねた。これについては8月に原稿を完成し、これによって近代を代表する教学者の論文8本を翻訳し

終えた。発信②の対話研究については、主にマールブルク大学神学者との研究交流という形で「仏教・他宗教比較研究」スタッフと共同で進めている。詳細については、同研究の報告を参照していただきたい。

研究の反省

本年度から、当研究班の「対話研究」の中心的活動であったマールブルク大学との共同研究を、「仏教・他宗教比較研究」として分立する形で行った。しかし、当「国際真宗学研究」スタッフのほぼ全員が実質的には同研究にも関わり、従って十分な時間を英文翻訳研究に費やすことが出来なかった。2001年度中には、これまでそろった4氏の翻訳論文を「近代真宗教学アンソロジー」として出版の予定であったが、全体の作業の遅れによって現在は出版社よりの出版許可待ちという形になっている。注や解説等をより一層充実させる作業を継続して行いながら、更に出版の準備を進めていきたい。

また、本年は図書整理の間、図書の発注などを含めた日常の研究作業が停止してしまったが、逆にそのことによって図書とそのデータに関する十分な整理が可能となった。今後はその情報を公開し、収集した資料のより有効な活用の方途を探っていきたい。

国際仏教研究

仏教・他宗教比較研究
—仏教とキリスト教の比較研究ならびに『教行信証』の独訳—

キャップ・教授　門脇　健
（宗教学）

本研究は、仏教とキリスト教の比較研究を通じて、浄土真宗を中心とする仏教が国際社会のなかでもちうる意味を把握することを目的としている。

このような目的を果たすために、本研究では、(1)従来必ずしも十分とは言えなかった、親鸞の諸著作のヨーロッパ語への翻訳、(2)研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供を、研究の二つの大きな柱としている。

2001年度は、以下の日程で、会議および研究会を開催した。

①2001年4月13日(金)、13時から。会議（於、第二研究室分室1）。

②2001年5月8日(火)、17時から。会議（於、第二研究室分室1）。

③2001年5月17日(木)、16時10分から。会議（於、第三会議室）。

④2001年5月31日(木)、16時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑤2001年6月21日(木)、16時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑥2001年7月5日(木)、16時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑦2001年7月19日(木)、16時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑧2001年10月25日(木)、16時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑨2001年11月21日(水)、18時から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑩2001年12月13日(木)、16時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑪2002年1月17日(木)、16時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑫2002年1月23日(木)、17時10分から。研究会（於、第二研究室分室2）。

⑬2002年3月8(金)、10時から、9日(土)、12時まで。研究合宿（於、湖西キャンパスセミナーハウス）。

(1)親鸞の諸著作のヨーロッパ語への翻訳作業について。

①の会議において、親鸞の著作のなかから、その主著である『教行信証』を独訳することに決定した。翻訳の順序としては、本論から訳し始めるのは困難を伴うことから、「後序」「総序」「別序」の順で三つの序を訳出し、おおよその訳語を決定した後、本論の翻訳作業に移行することにした。

②③の会議では、翻訳の具体的な手順を決定し、翻訳に使用するテキストと参考文献の選定作業を行った。翻訳の手順は以下のようなものである。まず、漢語に通じた現代語訳担当の研究員が現代語訳を予め作成し、それに対する全研究員による検討を研究会で行う。この際、どのような注解が必要かも検討する。次いで、ドイツ語に通じた独訳担当の研究員によって現代語訳に対する独訳の試訳を作成し、それに対する全研究員による検討を改めて研究会で行う。その後、試訳に修正を加えて決定訳とする。翻訳のテキストとしては『定本　教行信証』（親鸞聖人全集刊行会、法蔵館、1989年）を使用し、加えて、『真宗聖典』（真宗聖典編纂委員会、東本願寺出版

部、1978年）を参照する。参考文献としては、以下の諸文献を使用する。山辺習学、赤沼智善『教行信証講義』（全3巻、法蔵館、1951年）、金子大栄『口語訳　教行信証』（法蔵館、1961年）、石田瑞麿『親鸞全集』（全5巻、春秋社、1985-86年）、星野元豊『講解　教行信証』（全5巻、法蔵館、1994年）、*The Kyō gyō shin shō*, translated and annotated by Hisao Inagaki et al.（Dobosha,1966）; *The Kyōgyōshinshō*, translated by Daisetz Teitarō Suzuki, edited by the Eastern Buddhist Society（The Kawata Press,1973）; *The Collected Works of Shinran*（2 vols., Jodo Shinshu Hongwanji-ha,1997）; *Yuishinshō-Mon'i*（*Erläuterungen zu Yuishinshō*）,（Otani Universität,1999）。

③から⑦の研究会では、引き続き『教行信証』の独訳作業に入り、それぞれ3時間程度を費やして「後序」の翻訳作業と注解の作成作業にあたった。⑧から⑫の研究会では、同様にそれぞれ3時間程度、⑬の研究合宿ではほぼ一日を費やして、「総序」の翻訳作業および注解の作成作業を行った。

(2)研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供について。これについては、それまでの相互交流の記録の整理作業と、今後の新たな相互交流の計画の立案を行った。

それまでの相互交流の記録の整理については、本研究では、すでに1999年度と2000年度の二度、マールブルク大学との学術交流を行っている。このうち1999年度の記録については、ドイツと日本においてそれぞれ、*Buddhismus und Christentum—Jodo Shinshu und Evangelische Theologie—*（EB-Verlag, 2000）、『仏教とキリスト教の対話—浄土真宗と福音主義神学—』（法蔵館、2000年）としてまとめ、すでに公表をすませている。しかし2000年度の相互交流（2000年10月にマールブルク大学からゲルハルト・マルセル・マルティン、マイケル・パイ、2001年3月には、ハンス＝マルティン・バールトといった三名の研究者を大谷大学へ招き、共同研究会を重ねた）の記録については、未整理のままであり、公表には至っていない。そこで、2000年度の相互交流の記録を公にする作業に着手した。具体的には、2000年度の共同研究会において発表されたマールブルク大学の三人の研究者の旧稿をまとめると同時に、それに対する大谷大学側からの「応答」としての新たな原稿を加えるために、数人の執筆者を選定し、原稿の執筆要請を行った。

今後の相互交流の計画については、マールブルク大学との交流を継続発展することが最優先課題であるという認識の下に、1999年、2000年度の相互交流に続く三度目の対話として、新たなシンポジウム開催に向けての準備作業を始める必要性が確認された。具体的には、マールブルク大学のハンス＝マルティン・バールト教授が2002年度にサヴァティカル制度を利用して来日されることから、この際に大谷大学を会場とした研究交流会をもつことを目指し、そのための調整作業に着手した。

仏教文献研究

西蔵語文献研究
—北京版西蔵大蔵経総目録のデジタル化—

キャップ・教授　片野　道雄
（仏教学）

本研究課題は、本学所蔵の西蔵語文献を整理・研究するとともに、貴重な文献を内外に紹介することを目的とする。そのために以下の作業を行った。

(1)北京版西蔵大蔵経の電子化

この作業にはTibetan Language Kit for Macintosh（以下TLK）対応のデータベース・ソフト4th Dimensionを使用、入力フォームは嘱託研究員・福田洋一氏によって作成された。入力項目は以下のとおり。

- ＊北京版No.
- ＊部名
- ＊原本におけるテキストの所在情報（函号、開始および終了葉の情報）
- ＊影印版における所在情報（巻、ページ）
- ＊チベット語題名
- ＊サンスクリット語題名
- ＊著者名
- ＊翻訳者・校訂者名
- ＊金写での所在情報（No.、函号、開始および終了葉の情報）
- ＊デルゲ版での所在情報（No.、函号、開始および終了葉の情報）
- ＊ナルタン版での所在情報（No.、函号、開始および終了葉の情報）

本年度は、デルゲ版、ナルタン版、金写の情報を入力した。また、既に入力済みのチベット語・サンスクリット語題名について校正を行った。これらの作業は研究補助員を中心にしながら大学院生のアルバイトを加えて進

められた。

サンスクリット語題名校正の過程で、連声を適用させるべきか、これを適用させず音節を細分化すべきかという問題が提起された。この連声の適用・不適用については、概刊の『総目録索引』と『勘同目録』の間や、『勘同目録』の各巻の間でも統一がとれていない。とりあえず今回は『勘同目録』の電子化ということで、同目録の記述をそのまま採用、入力することとした。

(2)大谷大学図書館所蔵・チベット語文献の入力

本研究課題のもとではTLKを利用し、すでに『プトン仏教史』『ミラレパ伝』といったメジャーなチベット語文献が、本学所蔵の版本をベースとして入力されている。本学所蔵のいわゆる西蔵蔵外文献の中には、稀覯本が何点か存在する。クン・ゴンポキャプ訳『大唐西域記』やツァンナクパの『知識論決択広註善釈要集』、ブンタクスンパ『善説の陽光：倶舎論語義解明』などがそれであり、これまでは写真版出版という形で公開されてきた。今年度はこれら稀覯本のうちまだ写真版になっていないものを選び、公開を視野に入れ、TLKを利用し電子化する作業を行うこととした。

選ばれたのは、ゲエ・ツルティムセンゲ（dGe ye Tshul khrims seng ge）『インド・チベット仏教史（*rGya bod kyi chos 'byung rin po che*, 表題による。コロフォンには「*sKye bu dam pa' i rnam thar thos pa rgya mtshor dang ba' i ngang mo rnam par rtse ba*」とある）』（蔵外 no.11847）という46葉からなるウチェン体で丁寧に書写された写本である。

本テキストの存在は、19世紀のアムド地方の歴史書『テプテル・ギャツォ』に参考文献として挙げられているとおり、チベット人の学者の間では知られていた。しかし現存するものとしては本学所蔵本しかない（cf. チベット語歴史文献のビブリオグラフィーであるDan Martin, *Tibetan Histories: A Bibiliography of Tibetan Language Historical Works*, Serindia Publications, London, 1997, pp. 77-78）。コロフォンには（45b4-5）「語無畏比丘・ツルティムセンゲが、変化の地・北方シャムバラで法王・センゲが法を示して50年を過ぎ51年目の「勝利」という甲午年、孟夏心宿月上弦第三勝日（5月13日）に聖ゲエ寺にてまとめた。これにより教えという有情に大いなる利益が生ぜんことを」とある。「甲午」という執筆年は本文中に「今年甲午」という形で何度もあらわれるが、これが具体的に、西暦でいつのことであるかというと、コロフォンの後に付された年表の最後に「仏滅2350年の甲午年に著わした」とあり、それが1474年に該当することがわかる。ゴ・ションヌペーによる著名な歴史書『青冊』（1476-1478年）に僅かに先行する。

著者についての子細は不明である。本文中にハルンキワンチュク（1Ha lung gi dbang phyug）からギェーセー・トクメーサンポらに連なるカダム派の「ロジョン（blo sbyong）」の相承（19b6）、プトンもその名を連ねる秘密集会の相承を受けたこと（30b5-31a2）を記している。また自らのラマとして、タクポ一切智者・オーセーセンゲ（Dwags po thams cad mkhyen pa 'Od zer seng ge）とヨンジン・トンドゥプクンガ（Yongs 'dzin Don grub kun dga'）という2人の名を挙げている。ソナム・ヘーワンポ（bSod nams lha' i dbang po, 1423-1496）『カダム派陽光史』（1484年）のコロフォンには、彼が同書執筆を催促したと記されている。また、アク・リンポチェ（1803-1875）の『稀観書リスト』には、彼の著作として『仏および声聞伝（*Sangs rgyas nyan thos bcas kyi rnam thar*, MHTL 10818）』が挙げられている。ここに歴史家としての一面を伺い知ることができる。

以下に本書の構成と各章の名前を記す。大谷大学図書館所蔵本には第1章がなく、残念ながら完本ではない。

第2章　インド仏教史　-4b4
第3章　チベットの王統と仏教史　-7a45
第4章　律の伝承史　-9b5
第5章　カダム派史　-24a2
第6章　サキャ派史　-29b1
第7章　タクポ・カギュー派史　-36b3
第8章　カーラチャクラ伝承史　-40b6
第9章　その他諸宗派史　-44a6

以上の9章に続きコロフォン記され、最後に諸宗派開祖たちの生没年を記した簡易年表が付されている。

テキストの入力は一応完了した。しかし、写本自体に「da」と「nga」の区別がしっかりとなされておらず、また、綴りの誤りも散見され、公開に向けては、校正と他文献との対校を重ねる必要があろう。

(3)TLKのアップデートについて

マッキントッシュの基本OSがヴァージョンアップされ、Mac OS Xとなった。このOSは、これまでとは全く異なった文字セット（Unicodeチベット語）を使用しており、現行のTLKでは対応できなくなっている。そこでTLKをOS Xに対応するようにヴァージョンアップする必要に迫られた。

まず問題になるのは、これまで入力したデータ

が失われることなくOSX上でも利用できるのかということである。まずこの点について情報収集および検討が求められた。本年度末までに、嘱託研究員のHartwell氏はUnicode3.0の子細な情報を入手、Unicode文字セットおよびTLK文字セットが完全に互換性をもつことを確認、TLKからUnicodeまでの転換は何の問題もなしに行うことができるであろうと結論づけた。

仏教文献研究

パーリ語文献研究 —大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātakaの校訂・翻訳—

キャップ・教授　荒牧　典俊
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館所蔵の東南アジア地域所伝の膨大な南方仏教貝葉写本（大谷貝葉）の中で、特に稀覯写本と思われる一連の『パンニャーサ・ジャータカ』(50のジャータカ）と呼ばれるパーリ語文献群の体系的、文献学的研究である。

各地に伝えられるパーリ語の『パンニャーサ・ジャータカ』は、ビルマ文字、クメール文字、タム・ラーンナー文字等で貝葉に書かれており各地の寺に保存されてきたものである。この50のジャータカのうち、ビルマ版はイギリスのPTS協会からP.S. Jaini氏の編纂により既に出版されているが、大谷貝葉はそれとは別の系統で経名、その順序、あるいはその内容にかなり異同のあるクメール版であり、本研究を行う価値は十分考えられる。大谷貝葉には、この50のジャータカのうち、26種類のジャータカが収められているが、既に平成8-9年度本研究所共同研究と平成10-12年度文部省科研によって、そのうちの9ジャータカをローマナイズし、嘱託研究員田辺和子氏が将来されたバンコク国立図書館所蔵のマイクロフィルムとの照合によって、そのTransliteration及びその翻訳研究をほとんど完成することができた。本研究はその継続研究として、研究員、嘱託研究員、研究補助員及び内外の研究者の協力を得てTransliterationを校訂版として完成させるとともに、まだ着手していない17ジャータカの校訂、翻訳、研究を実施し、学界に公開していこうとするものである。

それに関連して、『パンニャーサ・ジャータカ』の研究者であるPTS（パーリテキスト協会）のP.スキリング氏（バンコク在住）がそれに関する公開講演を本学において1998年12月18日に行った。その英語による講演筆録の翻訳を嘱託研究員である畝部俊也氏が担当し、紀要に掲載予定である。

また本研究会は2001年度、11回の研究会を行った。

そのうち4月には長崎法潤氏（嘱託研究員）によるインド・オリッサ地方の貝葉についての報告、5月にスキリング氏によるタイのパーリ語写本の現状についての報告、6月には池田正隆氏（本学講師）によるラオス仏教の現状についての報告、10月には清水洋平氏（研究補助員）によるビルマ仏教の現状報告、11月にV. N. Jha氏（プーナ大学教授）によるインドにおける写本研究の現状についての報告などがなされた。

また畝部氏は、担当の34. Brahmaghosarāja-jātakaの研究を進め、対応するPTS版第29番目のジャータカとの比較研究を行い、その成立の前後関係を含めた研究成果を9月に本研究会で発表している。

また本研究協力者阿保亜矢子氏が23. Dhammika-paṇḍita-jātakaを扱い、対応するPTS版第8番目のジャータカとの比較研究を行なって、その研究成果を修士論文として提出している。

また各ジャータカのローマナイズ校訂の研究員、嘱託研究員、研究補助員、研究協力者による分担が以下のように決定し、現在進行中である。なおジャータカの番号は田辺氏比定のものによる。

Title	担当者（進捗状況）
12. Dulakapaṇḍita-jātaka [PTS 2]	茨田通俊（進行中）
13. Ādita-jātaka [PTS 1]	清水洋平・村田裕美（進行中）
14. Dukammāni-jātaka [PTS 46]	村上晋弘（Transliteration 済）
15. Mahāsurasena-jātaka [PTS 28]	清水洋平・羽塚高照（進行中）
16. Suvaṇṇakumāra-jātaka [PTS 40]	舟橋智哉・寺林　啓（進行中）
17. Kanakarāja-jātaka	田辺和子（進行中）
18. Viriyapaṇḍita-jātaka [PTS 25]	舟橋智哉・村西弘行（進行中）
22. Poraṇakapilapuranarinda-jātaka [PTS 43]	舟橋智哉・阿保亜矢子（進行中）
23. Dhammikapaṇḍita-jātaka [PTS 8]	阿保亜矢子（Transliteration済）
24. Cāgadāna-jātaka [PTS 7]	村西弘行（Transliteration済）
25. Dhammarāja-jātaka [PTS 16]	清水洋平（進行中）
26. Narajiva-jātaka [PTS 3]	

長崎法潤・舟橋智哉（科研研究成果報告書掲載済）
27. Surūparāja-jātaka [PTS 14]　吉元信行（同上）
28. Mahāpaduma-jātaka [PTS 27]　吉元信行（同上）
29. Bhaṇḍātara-jātaka　金光朋充（同上）
30. Bahalāgāvi-jātaka [PTS 33]　柏原信行（同上）
31. Setapaṇḍita-jātaka [PTS 30]　金光朋充（同上）
32. Puppha-jātaka　舟橋智哉（同上）
33. Bārāṇasirāja-jātaka [PTS 24]　畝部俊也（同上）
34. Brahmaghosarāja-jātaka [PTS 29]　畝部俊也（同上）
35. Devarukkhakumāra-jātaka [PTS 41] 清水洋平（進行中）
36. Salabha-jātaka　吉元信行・寺林啓（Transliteration済）
37. Siddhisāra-jātaka [PTS 48]
池田正隆・清水洋平（科研研究成果報告書掲載済）
38. Naraṇivakathina-jātaka [PTS 12]
長崎法潤・舟橋智哉（進行中）
39. Atitedevarāja-jātaka　清水洋平・寺林啓（進行中）

このうち14. Dukammānika-jātaka [PTS 46] 担当の村上晋弘氏と24. Cāgadāna-jātaka [PTS 7] 担当の村西弘行氏は、その研究成果を2002年度修士論文として提出した。

また寺林氏担当分の36. Salabha-jātaka は、すでにTransliterationが完成しているため、それを紀要に掲載する予定である。

今後の研究の課題として、まず大谷貝葉全体のTransliterationを完成した上で、その校訂版（critical edition）の作成をどのように進めていくか課題が残っている。またその校訂版に基づいて翻訳作業を進めていくのにも問題がある。既にタイから出版されているタイ語訳があり、このタイ語訳は偈頌の部分だけパーリ語になっているため、それをどのように活用していくかの問題である。また既にEFEO（フランス極東学院）の『パンニャーサ・ジャータカ』に関する研究の蓄積があり、それをどのように、この研究に活用していくかも問題である。またまだ参見できていないが、EFEOの目録にはあるラオス版やラーンナー版との比較も今後の課題として挙げられるだろう。ラオスやタイ北部のラーンナー文字文化圏では当時上座仏教が栄えていたと考えられるため、その現地調査を行うことがこの研究を進める上で是非とも必要になる。

このような研究課題の問題点を一つ一つクリアしながら、さらに今後研究員、嘱託研究員、研究補助員及び内外の研究協力者たちによってTransliteration、校訂、翻訳、研究などの作業を進めていく所存である。

仏教文献研究

漢訳文献研究
—大谷大学所蔵稀覯漢文仏教典籍の調査と公開—

キャップ・教授　木村　宣彰
（仏教学）

本研究は、大谷大学所蔵の稀覯漢文仏教文献について調査し、その中の特に重要なものを公開していくことを目的としている。初年度となる今年度では、その基本的方向性を確立するために本学図書館の『和漢書分類目録』や大正蔵の『昭和法宝総目録』などを利用して本学所蔵漢文文献の概要把握を行うこととした。

具体的には、まず研究範囲を大正蔵三十三～五十五巻に収められた中国撰述文献（一部、日本撰述を含む）に絞り、本学所蔵文献が大正蔵の底本・対校本としてどの程度利用されているかを『昭和法宝総目録』の記載により確認した。その結果、原本及び校本として利用されたものが107点（全体の約22%）、うち原本とされたものが50点（全体の約10%）、校本とされたものが57点（全体の約12%）にのぼることが確認できた。少なからざる点数であり、この事実だけを見ても本学所蔵の漢文文献の有する価値が知られることであろう。また中には、法蔵の『法界無差別論疏』のように本学所蔵本を原本とし校本が無いものが20点（全体の約４%）存在していることも注目に値する。

さて、以上はあくまで『昭和法宝総目録』の記述によったものであり、それらの諸本が本学所蔵のどの文献であるかを具体的に特定する必要がある。これを『和漢書分類目録』により、また疑問のあるものに関しては実物を確認することにより特定していった。

その状況の一例を挙げると、大正蔵五十五巻に収められた目録類に、そのままの題名では『和漢書分類目録』中には見いだされないものがあったが、実物調査を行うことにより次のように同定することが可能となった。

大正蔵、No.2165、円仁『日本国承和五年入唐目録』の原本（校本なし）、及びNo.2173、円珍『智証大師請来目録』の校本は、嘉永六年（1853）刊『天台入唐請来録』（餘大1764）によっている。

また、大正蔵、No.2163、常暁『常暁和尚請来目録』、No.2164、円行『霊巌寺和尚請来法門道具等目録』、

No.2168B、恵雲『恵雲律師書目録』の校本、及びNo.2174B、『禅林寺宗叡僧正目録』の原本は、享保二年(1717)写本『八家各別録』の青写真による複製本(余大3604)によっている。

このように大正蔵に利用された本学所蔵本を個々に特定していった結果明らかとなったのが、「宗大」「余大」等に分類されている貴重書指定を受けていない文献が非常に多数利用されている事実であった。

このことは何を意味しているかと言えば、現在貴重書指定を受けていない漢文文献の中にも有意義な文献が存在している可能性があるということであり、また大正蔵で利用されていない、より良質の本学所蔵文献がある可能性も考えられるということであった。そこで、本学所蔵の異本の有無について、『和漢書文献目録』の「第二」「第三」や『瑞蓮寺文庫目録』などの六種の目録にも範囲を広げて調査したところ、大正蔵で利用されていない相当数の異本を本学が所蔵しており、その中には注目すべき文献も数点あることが確認できた。

例えば、大正蔵三十八巻に収められた慈恩大師基の『説無垢称経疏』は、本学所蔵の天保七年(1836)の写本(余大157)を底本とし続蔵本を対校本としている。しかし、本学にはそれ以外にも「南都古版木活版補」とされる刊本(余甲5)が存しているのみならず、「第二」目録に掲示されている享保十六年(1731)の写本(余大4098)、天明三年(1783)の写本(余大4986)も存しており、『説無垢称経疏』解読にあたっては是非とも参照されるべき異本であると考えられる。

同時に、この『説無垢称経疏』の例などを見ると、さらに二つの問題点に気づかされる。ひとつの問題は、大正蔵でも依用されている「続蔵本」の性格についてである。中国撰述仏典については、大正蔵のみならず続蔵中にも多数の重要文献が収録されており、中にはこの『説無垢称経疏』の例に見られるように、大正蔵の原本や校本として利用されたものもあり、また続蔵のみでしか見られない文献も多数存在する。

しかし、続蔵本の底本・校本については、それがどのような文献に基づいているのか、いまひとつ不明確な点も多く、「続蔵研究」ということ自体がひとつの重要なテーマとして浮かび上がってくる。大正蔵の中には、続蔵本を底本として校本を持たないものも相当数存在しており、例えば法蔵撰とされる『華厳策林』(大正四十五巻)などがそうである。これには本学にも写本(余大3706)が存在するところから、続蔵本の由来を含めて研究がなされる必要性が考えられる。いずれにしても仏教研究の前提となる続蔵それ自体に研究の必要性があるのである。そのための第一歩として本研究会においては、続蔵の目録のデータベース化を開始することとした。

もうひとつの問題点は、確かに本学の所蔵文献に有益なものが見いだせるとしても、その貴重性・稀覯性を明らかにするにあたっては、他所の所蔵状況・現存状況を合わせて確認することが不可欠であるという点である。そこで大正蔵三十三〜五十五巻の諸本に対して『仏書解説大辞典』を利用して他所の所蔵本を確認していったところ、大正蔵では利用されていない諸本の存在が多数確認されるのであり、例示した『説無垢称経疏』についても、本学所蔵本以外に京都大学(蔵経書院本であり、おそらく続蔵の底本であろう)と龍谷大学に写本が、哲学堂(現東洋大学)に刊本が存在することが確認される。

しかしながら、現在仏書の所在確認を行ううえで『仏書解説大辞典』がもっとも便利なものであるとはいえ、その記述・情報は完全ではなく、またいささか古くなってしまった面もある。本学の「第二」「第三」目録等の情報が充分反映されていない点などはその一例と言えよう。

このような事情を通して浮かび上がってきたテーマが、他の大学・研究機関と共同で、現存する仏書の網羅的リストや目録、あるいはデータベースといったものを作成していくことはできないかということである。この点について、本研究会は昨年度まで担ってきた「大蔵経学術用語研究」の対外的役割の一貫として、仏教系六大学における共同研究の一テーマとしてこれを提示していくこととした。

以上、今年度は主として中国撰述文献に絞って概要把握を行ってきたが、本学所蔵文献には、南都論叢などの貴重な日本撰述文献も多数存在しており、来年度はこれ等についても可能な限り調査・研究を進めるとともに、刊行していくべき文献についてより具体的な選定作業を進めていきたい。

現代思想研究

大谷大学FD研究
—大谷大学におけるFDの基礎構築—

キャップ・教授　並木　治
(フランス文学)

1999年度、2000年度に引き続き、2001年度も、本学に

相応しい FD とは何かという課題に対し、主として公開研究会における事例報告と質疑・討論を通じ、さまざまな可能性をひとつひとつ検討してゆく方法を採った。あえて研究員のみによる研究にではなく、公開研究会に研究の中心を据えたことの理由は、あとでも述べる通り、FD そのものが、事務職員を含めた、場合によっては学生も含めた基本的意識の共有と連帯を必要とするからである。この意味で、研究会にはほぼ毎回、教員のみならず、職員の、ときには学生の参加があったことも特筆されるべきであろう。授業期間中ほぼ月１回のペースで行われた研究会は、活発な質疑と討論ゆえに毎回３、４時間にもわたることが多かった。

それぞれ多様でさまざまな具体的事例研究が主であったが、ここであえて内容的な共通点を抽出するなら、それぞれ単に教育技術の向上や補習授業のノウハウの研究ではなく、人と人との生きた関わりのなかで共に学びあい成長しあうための FD という、研究当初からの課題に添った本学なりの FD の模索と追求であったと言える。この点は前年度まで変わることのない研究上の特徴である。一人一人の学生の資質に応じた達成感、満足感、ひいては学びの自信と豊かなコミュニケーション能力の両立のための FD を目指すという認識は研究員間ではいっそう共有できたように思う。

2001年度の研究員としては、前年度の寺林脩、織田顕祐、高井康弘、淺若裕彦、川田隆雄、谷口奈青理の諸氏に加えて、藤嶽明信、渡辺啓真、ディディエ・ヴェステル、藤本芳則、浦山あゆみ、吉田孝夫、東舘紹見の諸氏にもお願いしほぼ各学科横断型の研究員体制を組むことができた。嘱託研究員としては前年度に引き続いて岡田伸夫氏（京都教育大学）と石村雅雄氏（京都大学）にお願いすることができた。研究全般のとりまとめ役のチーフは、前年度に引き続き並木が務め、研究会の企画と学外 FD 活動と連携を中心にお世話をさせていただいた。研究班庶務については谷口奈青理氏にお引き受けいただいた。

2001年度に開催された研究会（研究班内部の打ち合わせを除く）の日時とテーマ、話題提供者は次のとおりであった。（所属と身分はいずれも当時のもの）

①５月11日（金曜日）午後６時より
「自己生成的 FD の構築の試み」
発表者：石村雅雄氏（京都大学高等教育システム開発センター助教授）

②６月８日（金曜日）午後６時より
「大学における構成主義教育の実践報告」
発表者：川田隆雄氏（本学助教授）

③６月27日（水曜日）午後６時より
「導入教育のひとつの試み」
発表者：寺林脩氏（本学助教授）
コメンテーター：石村雅雄氏（京都大学高等教育システム開発センター助教授）

④７月25日（水曜日）午後６時より
「みんなでミニシンポジウムやろうか
—基礎セミナーにおける１つの試み—」
発表者：岡田伸夫氏（京都教育大学教授）

⑤10月26日（金曜日）午後６時より
「当日ブリーフレポート方式による講義の進め方」
発表者：宇田　光氏（松阪大学教授）

⑥11月30日（金曜日）午後６時より
「小規模文系大学における自主ゼミの試み
—FD から導入教育まで—」
発表者：中村博幸氏（京都文教大学助教授）

⑦12月14日（金曜日）午後６時より
「基礎演習のシミュレーション
—アイディアの拡散・抽出・討論—」
発表者：中村博幸氏（京都文教大学助教授）

前年度までと比べ、今年度は学外で先進的 FD に第一線で取り組んでおられる方々の報告を伺う機会を多くもつことができた。反面、学内研究員の事例報告の機会がほとんどなくなってしまったのは反省点である。ただ各研究会では、新たに加わえられた研究員も含め、従来にも増して熱い議論が展開されたことは大きな収穫であった。また、新たな試みとして、京都文教大学の中村先生により十数名の学生が参加しての模擬ゼミ授業が行われ、出席者全員にとってまことに得難い機会となった。

他にも強制を排しあくまで各教員の持ち味を尊重しつつ行う自己生成的 FD の構築法、今日のユニバーサルアクセス時代において大学教員に求められる根本的意識改革と、新たな局面に対応しうる IT 応用グループワーク学習、学生の意欲喚起と動機づけのための生きた学科ガイダンスの実践、出席カードを意見交換に利用する方法、授業手法としてのブレーンストーミングや KJ 法の検討、グループディスカッションを喚起するための理論の応用や工夫、授業ホームページ作成やＥメール利用による授業活性化、テキストを使用させて当日の授業内で学生にブリーフレポートを作成させ個別に対応する授業法等々、教員・学生のコミュニケーションを土台にしつつ学生の意欲喚起と授業活性化を目指す具体的施策について、毎回熱のこもった議論がさまざまに交わされた。具体的提案や議論の詳細については年度末に刊行した『2001年度　大谷大学 FD 研究報告集』をご参照いただ

くこととし、ここでは年間を通じて得られた成果と、改めて浮き彫りになった課題と問題点を整理しておきたい。

まず、仏教の大学である大谷大学で、なぜFDの構築が急務であるかという問題について、研究会での議論をもとに、ここで再度確認させていただくことを許されたい。

そもそもFDという略称で意味される授業力向上の研究は、好むと好まざるとにかかわらず、大学が社会から回答を求められている今日的課題である。質的にも、価値観のうえでも多様化した学生たちであっても、大学は彼らに相応しい内実の伴った教育、知的訓練と達成感、そして人間的成長の機会を提供しなければならない。それはたとえ困難であっても、高等教育の専門家としてのわれわれ教員の社会的責務なのである。そしてその目標実現のためのFD研究も、前述したごとく、一部の教員が担いうる研究ではありえず、ひろく大学教員全体の連帯、また学生との連帯や学びあい意識があってはじめて可能なものであると考えられる。ことはまた、学力のみならず豊かな人間性の育成をも使命とする本学に真に相応しい大谷大学流FDのあり方を追求することでもある。学生の知的関心や能力を効果的に引き出せるように一層の工夫をこらし、さまざまなレベルで魅力ある授業を展開できるかどうか、ひいては大学全体としての知的活力を高められるかどうかが、本学の学問的伝統を今日の大衆化状況のなかで生きた形で維持し展開させることが、今後の本学の命運を基本的に決する問題であると言っても過言ではないからである。

しかしながら、毎回きわめて貴重な示唆に富む経験談や意見が出るにもかかわらず、出席者が多いときでもせいぜい十数名程度であったことは、研究班の、とりわけチーフの責任であるとともに、今後大学全体としても大きな課題として真摯に捉えるべき問題であろう。

先にも触れたように、研究所の「指定研究」とはいえ、研究スタッフだけで独走し、近い将来、研究成果を一方的に提示することに至ることは最も避けなければならない点である。教員の多くとギャップが生じるようでは、かえって望ましいFDの展開を妨げる結果ともなりかねないからである。特に大谷大学のFDでは、すべての構成員間の心の連携が求められているのであるから尚更である。もとよりFDそのものが本質的に教師団のチームワーク、連帯意識を必要とするものだけに、教員チームの意識実態をまず見据えて、皆でそこからいかに共に意識向上を計るかが、本学では最も重要な研究テーマとされなくてはならない。この意味では、当研究班で教職員の、そしてまた学生の意識調査を行えなかったことが一つの反省点である。

すでにきわめて多様な学生を受け入れてきている以上、従来の教育理念や教育手法だけでは、学生一人一人のレベルに応じた学びの達成感と満足感を与えるという観点からすると、そのための効果的授業ないし教育的サービスが、すでにかなりの程度にまで難しくなってきている点を直視しないわけにはいくまい。そして、この傾向は、また今後いっそう困難になり、ひいては本学の学問的伝統やその雰囲気の継承にとって阻害要因となりかねないとも懸念される。もとより研究者養成とは、それに相応しいごく一部の学生を対象とすればすむのではなく、学びにおける広い裾野と、その開放的で知的な雰囲気のもとでこそなされる互いの切磋琢磨が必要と考えられるからである。

研究会に出席したある学生の発言に「ここに来られない先生は一体どう考えておられるのでしょうか」というのがあったように、この局面をまず打開しなければなるまい。恐らくFDなるものが、ただでさえ多忙な教員に、一層の犠牲的努力を強いるものではないか、という恐れを抱かせているに違いない。情報交換をしあい、連携しあい、支えあうことが、いかに授業効率を高め負担を軽くすることにつながるかについて、FD研究はまだ十分にその意味と有効性を示し得ていないといえる。

このことと密接に関連する問題として、FD活動を今後、大学の自己点検自己評価の活動や授業評価アンケートと、教務委員会の活動と、さらには入学ガイダンスや進路就職指導等といかに有機的に繋げてゆくか、そのための教職員の連携をどう強化してゆくか。これまでの個々の活動とその積極的意味を踏まえつつ、新たに学生の視点に立って、かつ全体的発想のもとで（例えば学習支援センターのようなところで）教職員一体となって、さまざまな可能性を一元的に追究することが必要ではあるまいか。

研究成果の公開という点では、はじめて「研究報告集」の刊行を実現することができた。その形式も、研究会の雰囲気をできるかぎりそのまま伝えるために、あえていわゆる「ライヴ収録」とし、質疑応答も、基本的にそのままの雰囲気や口調が伝わるようにした。今後の課題としては、インターネットのホームページ立ち上げが考えられる。教育に手間をかける大学、学生との関わりを大切にする大学というスタンスを、誰でも容易に検索できるホームページに示すことは、今後学生募集にも大きな力となるはずである。

このような点を含めて、2001年度の「大谷大学FD研究」では、授業活性化のためのFDの具体的方策を示すことはできても、このような全学的FD構築のための諸

策を具体的に明示・提言するまでには至らなかったことも反省材料である。これは、われわれが敢えて組織論を急がず自発的生成をあくまで重視したことの裏返しとはいえ、ひとつの反省点であり、今後の課題として大きく残された部分である。

本研究は前年度に引き続き2001年度においても私学振興事業団から補助金を得ることができ、基礎的研究条件や資料等をいっそう整えることができた。資料は基本的にすべて研究所の書架に配置され教職員に公開されている。大いに利用されることを念願する次第である。

今後もFD研究は、その形はどうであろうと、教職員全体の意識の共有と相互協力のもと、人間コミュニケーションを軸とする大谷大学に相応しいFDの方向を見極めつつ続行されるべきであろう。大谷大学のFDが全学的規模でより実り多きものとして展開されることを念願しつつ、2001年度の研究経過報告を終わらせていただくこととする。

現代思想研究

大谷大学DB研究 —大谷大学におけるDBの基礎構築—

キャップ・教授　草野　顕之
（日本史学）

本研究は、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行うものである。本年度は、昨年度に引き続いてデータベース構築の根幹を為すデジタル画像の制作に向けて、研究及び実作業を行うと共に、文化財のデジタル化及びその提示方法に関する諸問題を検討し、デジタル画像の作成からデータベースの公開に至るまでの全体工程を視野に入れつつ、問題点の指摘とその解決を目指した。

【スキャニング作業】

草野・片岡・松川各研究員の指導のもと、研究補助員（箕浦）とアルバイト4人が、清沢班が西方寺にて撮影してきた35ミリポジフィルムの移管をうけ、昨年度に引き続いて高精細スキャニング及びデジタル化作業を行った。

【図書館蔵貴重書撮影作業】

昨年度に引き続き、図書館1階の作業室において、高精細画像撮影用のカメラ一式・撮影台一式・ストロボ一式による図書館蔵貴重書撮影作業を行った。前期は、昨年度と同様、撮影面の露光ムラ除去のためのテスト撮影を行ない、撮影されたフィルムをスキャニングしてデジタル化し、精度を評価するという作業をなお繰り返す必要が生じたため、貴重書の撮影自体をルーチン化するには至らなかったが、貴重書のうち、北京版チベット大蔵経、チベット語蔵外文献の一部を、十分な精度のもと、フィルム撮影→スキャニングによるデジタル化を行うことができた。

後期においては、この作業を一層進展させる予定であったが、図書館移転作業による振動・粉塵の増加に伴い、作業室における撮影条件が基準を満たさなくなったため、撮影作業を中断するに至った。

【学内研究会活動】

作業と並行して、研究員・補助員・アルバイトが意見を交換することを通して個々の作業についての理解を共有するために、同時にデータベース研究班の研究内容を広く学内に知っていただく目的で、学内公開研究会を以下の日程で開催した。

（通算）第6回　4月20日㈮18：00　於：第5会議室
「デジタル画像作成における諸問題」　片岡　裕

第7回　6月8日㈮17：50　於：3101教室
「日本史史料デジタル化の諸問題」　草野顕之

第8回　6月29日㈮17：50　於：第5会議室
「IT化と博物館の情報化」　赤尾栄慶

第9回　11月2日㈮17：50　於：3101教室
「デジタル画像のデータフォーマット」　柴田みゆき

第10回　12月28日㈮17：50　於：3101教室
「清沢満之自筆原稿のデジタル化に関わる諸問題」
加来雄之

以上、計5回の研究会を回顧してみると、本研究班が推進している貴重書籍のデジタル画像化に関わる技術的諸問題について、専門研究者からの報告がなされているほかにも、デジタル化・情報化された資料自体を人文科学研究においていかに利用していくのか、あるいは、いかに提示・発信していくべきかという点についても意見

交換・討論できたことが大きな収穫であった。

【学外研究活動】

スキャニング作業によって作成されたデジタルデータを研究者が利用する際、それは量販型パーソナル・コンピュータを使って再現・提示されるのが通常である。しかしその際、利用されるパーソナル・コンピュータ及び周辺機器の性能が低ければ、いかに高精度のデジタルデータを用意してあっても、正しく再現されない結果となってしまう。この点で、片岡研究員が以下の学会発表を行い、特殊な高品位専用装置を超える品位で、静止画、動画、音声を再生するPCを容易かつ安価に開発・作成する指針と方法を示した。

片岡　裕「Ultra Hi-Fi PCの開発：高再現性データの高品位再生」
於：「人文科学とコンピュータシンポジウム」12月15日、大阪市立大学　学術情報総合センター。予稿：『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』pp.243-250.（情報処理学会シンポジウムシリーズVol.2001所収）

【来年度に向けて】

来年度も引き続き、西方寺蔵の清沢満之自筆本のデジタル画像化、図書館蔵貴重書（北京版西蔵大蔵経、チベット語蔵外文献など）のデジタル画像化を進めていく。また、来年度は、大谷大学図書館に所蔵される「北里蠟管」のデジタル化について、山本研究員を中心にして検討を重ねていく所存である。

2001(平成13)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

金石文献による中国華厳宗の研究

研究代表者　織田　顕祐
（仏教学）

中国の華厳宗の教学は、唐代の賢首大師法蔵によって大成された。それは、様々な形で展開した中国の仏教的思惟を総括し、以後の中国・朝鮮・日本の仏教の展開に大きな影響を与えた。その華厳宗の成立と展開については、従来仏教内の文献によって教理史的に研究するのが主な方法であった。しかしながら、仏教は本来、人間の全体的な活動であるから、その全体像を解明するためには歴史的・社会的・時代的などの様々な角度からの研究が不可欠である。

本研究は、そうした発想に基づいて、中国華厳宗の思想的な展開を、仏教外の歴史資料とも言うべき金石文などによって解明しようとするものである。昨年度はこうした観点に立って、主として法蔵と則天武后をめぐる基礎文献の精読に努めた。その結果、法蔵と武后の想像以上の、密接な関係を知る事ができたが、それ以外にも次のような諸点が新たな疑問として浮かび上がってきた。

○様々な状況から見て法蔵は、洛陽の仏授記寺で武后の腹心である薛懐義らと必ず関係があったはずであるが、法蔵側の資料からはそれが窺えない。それはどのような理由によるのであろうか。

○西明寺円測（−696）は、『寶雨経』の後記にも薛懐義らと名を連ね、長安の大乗基（632−682）らとは異なった複雑な行動をとっている。法蔵の「性相融会」などの思想は、前半の約20年の間に既に完成しているので、この3者の関係は微妙である。また、円測のほうが玄奘の思想を正確に伝承しているという研究もあり、華厳宗と法相宗の関係を再点検しなければならない。

○華厳宗の法脈についていえば、法蔵と澄観の間に不空らの密教が隆盛となっている。澄観は、不空の訳場に参加しており、そこから梵語の知識を得たのではないか。『普賢行願讃』が不空訳であることを考えると三聖円融観と不空とは密接な関係があったのではないか。

○天台六祖湛然（711−782）の活躍時期は、不空の活躍時期とほとんど重なっている。湛然には梁粛の碑銘が有ったようであるが、それ以外に世俗権力とのつながりを伝えるものがない。それは一体どのような理由によるのであろうか。

このような諸点は幅広い観点からの研究によらなければ

解明する事はできないが、そのための一助として以下の文献を選んで輪読を重ねた。

① 唐杭州霊隠山天竺寺大徳詵法師塔銘並序
（唐　皎然撰、『全唐文』918）
② 清涼国師妙覚塔記（元　行育撰、原碑拓本）
③ 釈大方光仏華厳経論主李長者事述
（唐　馬支撰、『全唐文』816）
④ 唐大興善寺故大徳大弁正広智三蔵和尚碑銘並序
（唐　厳郢撰、原碑拓本〔『金石萃編』102〕）
⑤ 大唐西京千福寺多宝仏塔感応碑
（唐　岑勛撰、原碑拓本〔『金石萃編』89〕）
⑥ 唐国師千福寺多宝塔院故法華楚金禅師碑
（唐　飛錫撰、原碑拓本〔『金石萃編』104〕）
⑦ 麓山寺碑
（唐　李邕撰、原碑拓本〔『金石萃編』78〕）
⑧ 唐台州国清寺湛然伝
（『宋高僧伝』巻第六、大正50）

これらのうち、①②③は法蔵以後の華厳教学もしくは華厳経思想に関する人物について基礎資料である。④は華厳宗第四祖とされる澄観がその訳場に参加した不空三蔵の伝記に関する第１次資料である。⑤⑥⑦⑧は主として天台教学に関するものである。天台教学は、もともと法蔵が自己の思想の拠りどころとしていたものであり、智顗以降六祖湛然までの間は俗に暗黒時代と称されるような状況であった。また湛然と澄観は密接な関係にあり、こうした意味においても、華厳と天台の関係は見逃す事ができないのである。特に⑤⑥の碑主である楚金に関する資料は、その暗黒時代の長安における天台法華思想の様子を知るための貴重な資料である。

最後に、これらの資料の精読を通して明らかになった点について簡潔に言及しておきたい。武周期における仏教の隆盛は、決して法蔵や華厳宗に限定されたものではなく、仏教全般にわたったものであった。武后が政権を握ったいわゆる武周期は、それまでの道先仏後から一転して仏先道後となり、仏教が大いに振興されたからである。また法蔵以降は、禅宗の台頭、天台宗の復興、密教の隆盛など仏教界は複雑な様相を呈していく。従って華厳教学の展開に関しても、幅ひろい同時代的な要素との関係を看過することはできないのである。また、碑文の撰述や碑の作成などは相当な経済的負担であったはずであり、仏教者と為政者との関係を無視する事ができないのである。

共同研究

大谷大学における社会福祉学の基盤構築に関する研究

研究代表者　佐賀枝　夏文
（社会学）

研究班の主な役割として、真宗大谷派の社会福祉事業の足跡を発掘、資料整備することである。このことに関しては、2001年10月に大谷派慈善協会編『救済』の復刻版が刊行されたことで大きく前進した。今後、真宗大谷派の社会福祉の初期の足跡が明らかにされることが期待される。また、大谷婦人会（大谷派婦人法話会）の機関誌『婦徳』の総目次の検索とコンピュータ入力が完成したことは大きな成果である。これらの研究資料の基盤整備は、本学の社会福祉学研究を支える学問的資産となるであろう。

研究班のもうひとつの役割は、本学における社会福祉学のあり方について検討を加えることであった。このことに関しては、研究員の各先生を囲んで研究会を開催し検討を行った。今後の本学独自の社会福祉学の構築のための方向性の示唆となることを期待するものである。その研究会報告の一部を抜粋し報告としたい。

「大和正克先生を囲んで―いのちの教育―」より

わが国の社会福祉は、制度のための制度、援助技術は援助技術とそれがバラバラで動いているような印象を強く持っている。いろいろ事件が起るとすぐ「心の教育」ということを言われるが、そうではなくて、「心の教育」の前に「いのちの教育」というのが、もっと大事なことであると思う。社会福祉というとイギリスの言葉ではないですけど、「ゆりかごから墓場まで」という言葉でかたられるが、私はやはり「受胎から死まで」のものをしっかり押さえておかないと社会福祉は実現しないと思う。

社会福祉の定義づけということで、広義のものとすると、昔はいわゆる要援護者を対象としていたけど、そうではなくて「すべての人間、一人ひとりが、受胎から死に至る全生涯にわたって“いのち”を全うできるよう」ということである。「輪の福祉」というのは、こういう生死というのを起点にして、胎児から、乳児から、幼児から一生を通してあると思う。その中で、今はどちらか

というと介護福祉ばかりが言われているが、そうではなくて、胎児のときから福祉が円を描けるような、そういうシステムをつくっていくというのが大事であるとの思いがあり、こういう定義づけをした。

その中で特に、先ほど指摘したが非常に広いものであるから、学問的には今マクロ環境というのは、経済、政治、文化、家庭、地域社会とか言っているが、一番肝心の科学技術の領域が欠落している。自然という領域が、今の社会福祉の理論の上ではもう完全に欠落をしている。科学技術というのは、凄いものがあるだろう。人間の生きざまから、価値観から、一切合切変えてきた、そこも押さえていく必要があるということでマクロ環境の中に入れて、この環境をどのような形で整備していけばよいのか考えている。

「東一英先生を囲んで—司法福祉—」より

司法福祉が社会福祉と異なる最も基本的な特質は、その福祉的、教育的活動の対象となる契機が少年の非行、あるいは家事当事者の紛争という法律上の訴訟であるということである。従って規範的解決が優先されて、それによって終わりになるからである。

「裁判」というものの基本的な性格は、実体的な紛争を法律的に解決する法律上の訴訟を対象としており、その合法的解決、規範的解決を図る国家の権力的活動である。法律上の訴訟に徴表される個人、家族、地域社会の具体的な生活問題を総合的に解決することを基本目的にしていない。法律上のトラブルを解決することが目的であって、なぜそういうトラブルが個人的、家庭的に起こっているかということは考慮されない。極端に言えばそのようなことである。

裁判所が行うのは、民事事件であれ刑事事件であれ、それは基本的に司法手続きなのである。こうした司法過程に係属するものを対象とすることが司法福祉の領域となる。そういう意味で司法福祉は、司法過程に係属するものを対象とする援助体系である。そこが一番違うところである。

それに対して「社会福祉」というのは、国民の生活破壊問題をめぐる生活補助の制度、政策として、個人、家族、地域社会の生活擁護の要求に対処するために展開してきたものである。

「佐賀枝先生を囲んで—真宗大谷派の社会福祉事業—」より

真宗大谷派がどのような形で、明治の後半から大正の米騒動、関東大震災まで、社会福祉に関わったか報告したい。

長年かかって真宗大谷派の大谷派慈善協会の機関誌『救済』を集めてきた。収集が終わってから、長い間、わたしの手元で温めて来た。ようやく、ここに復刻が完成をみた。

雑誌という性質上、図書館で保管されておらず、領布を受けた寺院は何か月間かは置いてあったとしても、おそらくは多くが廃棄処分になったものだろう。この『救済』の全冊揃えたのは、皆無であった。国会図書館は浅草別院からの寄贈本で、2冊の欠本があり、実に収集が困難であった。雑誌名が知られている割にはなかなか全冊揃いで見た人がいない貴重な資料だと吉田久一先生の指摘があった。

同協会の設立の経緯というのは、親鸞聖人の宗祖650回忌の大御遠忌法要が1911（明治44）年4月18日から28日まで厳修された。その記念行事の一貫として4月26日に京都の高倉大学寮の講堂で、感化救済事業の講習会が開催されたことを契機としている。この講習会を、政府は重要視し必要に関わりをもった。当時の内務相の宗教局長の斯波淳六郎、司法省の監獄局長、内務省の書記官、中川望を招聘して開催された。これを契機に同協会が設立された。

真宗大谷派の社会福祉の系譜は『救済』をたどることで、初期の全貌がつかめると思う。今後、『救済』を大いに活用していただき研究されることを期待する。

1921（大正10）年2月に宗務機構の中に竹内了温を迎えて、社会課が設置された。それまでは同協会は、有志の集まりであったが、宗務機構に社会課が設置され体裁が整った。

社会課が設置され、竹内了温が第1回の社会事業講習会を開催する。これが日本で3番目の社会福祉専門職の養成機関であった。

個人研究

唯識思想における有相と無相
—特にゲルク派におけるもの—

研究代表者　兵藤　一夫
（仏教学）

唯識思想は識において顕現する形相（行相、形象ākāra, rnam pa）を真実と見るか虚偽と見るかにより、大きく二つの立場に分けられる。この立場の違いは既にアサンガ（無著）・ヴァスバンドゥ〈世親〉兄弟とスティラ

マティ〈安慧〉との間に垣間見られる。前者は、顕現する形相を依他起性なる真実とし、その形相が意識によって外界に実在すると執されたものが偏計所執性であるとする。それに対して後者は、種々な形相を有して顕現する識（全体としてのもの）は依他起性であり実在するが、形相それ自体は虚妄なもので偏計所執性であるとする。この立場の違いについてスティラマティ自身はそれほど意識的に明示しなかったが、『成唯識論』の中で、ダルマパーラ〈護法〉との立場の違いとしてそれが伝えられている。この二つの立場の違いが後に、それぞれ有相（sākāra）唯識、無相（nirākāra）唯識となっていくのである。

その有相・無相の立場の違いは、既に明らかにされているように（沖和史「無相唯識と有相唯識」『講座・大乗仏教』8唯識思想　所収）、8世紀にシャーンタラクシタが両者を区別したことから明確化されるようになる。彼は「この〈見解〉について少しばかり吟味せねばならぬことがある。それらの形象は実有なもの（tāttvika, de kho na nyid）であるか、あるいは、影像等の如く厳密な検討がくわえられない限り好ましく承認されるべきもの（avicāraikaramya, ma brtags pa gcig pu na dga' ba）であるのか」〈一郷正道『中観荘厳論の研究』p. 145〉と述べて、形相が真実であるのか、影像等の如くに虚偽なものであるのかを別々に検討し批判している。すなわち、識において顕現する形相が真実であるとすれば、それは外界実在論者たちの有形象知識論と同様に、「知識が一にして形相が多なる」という矛盾に陥いる。また、顕現する形相は無限の過去からの顛倒の習気から生起した虚偽なものであり、識は本性としては水晶のごとく形相の無い清浄なものであるとすれば、どうしてその形相が明白に認識されるのか、形相と知識は別なものではない、とシャーンタラクシタは非難する。

ところで、この有相・無相はディグナーガやダルマキールティによって発展した仏教の認識論とも深く関係している。シャータラクシタも彼らに大きな影響を受けているのである。この有相・無相の問題はその後もインドの仏教認識論の中の主要な論点となり、活発な論議がなされている。例えば、11世紀には、有相唯識の系譜としてジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティがおり、無相唯識としてラトナーカラシャーンティが活躍している。

チベット仏教はシャーンタラクシタ以降のインド仏教、中でも、最後の隆盛期とされる11世紀のインドの仏教思想を忠実に受容している。しかも、その中でゲルク派の中観思想と認識論・論理学に関する受容と消化のレヴェルは高いものがある。そして、この有相・無相の論議は、ディグナーガやダルマキールティの認識論や論理学を受容したチベットにおいて継承されている。したがって、インドにおける有相・無相の問題を研究するためには、チベットのゲルク派に伝えられ展開されているそれらの議論の内容を知ることは大いに有用である。

ゲルク派でも形相を真実とするか虚偽とするかということに関しては、見解の違いがあったようである。（ツルティム・ケサン「形象真実と形象虚偽について」『日本西蔵学会会報』No. 45, 2000）前者は、ケートゥプジェであり、後者はタルマリンチェンである。彼ら二人の師であるツォンカパの立場は明確ではない。ただ、この問題を考える際には、タルマリンチェンも注意しているように、当該の「形相が真実である、虚偽である」意味を確認しておくことは重要である。タルマリンチェンによれば、凡夫の直接知覚の識において顕現する形相、例えば眼識において顕現する青などには無明の影響がないとするのが形相真実の立場、無明の影響があるとするのが形相虚偽の立場である。一方、ケートゥプジェによれば、認識形相は実体として成立していると主張するのが形相真実であり、認識形相は増益されたものであると主張するのが形相虚偽である。

個人研究

大谷大学におけるサンスクリット語授業のテキスト作成

研究代表者　山本　和彦
（仏教学）

本学サンスクリット語文法の授業用テキストとして、宮下晴輝編訳『サンスクリット語文法』（オリジナルはGeorge Hart著 *A Rapid Sanskrit Method*, Wisconsin 1972）の補遺改訂版を準備中である。この文法書の長所である練習問題の豊富な点についてはそのまま継承する。補遺する点として、練習問題のなかで使用される名詞・形容詞の格変化と動詞の活用をすべて表にして提示する。さらに効率的に学生自身で学習できるように文法書の構成を検討する。そのための資料として、F. Kielhorn, *A Grammar of the Sanskrit Language*. Bombay 1912 ; A. A. Macdonell, *A Sanskrit Grammar for Students*. London 1927 ; W. D. Whitney, *A Sanskrit Grammar*. Cambridge 1923 ; J. S.

Speijer, *Sanskrit Syntax*. Leiden 1886 ; R. S. Buchnell, *Sanskrit Manual*. Delhi 1994 ; 榊亮三郎『新修梵語学』1907 ; 岩本裕『サンスクリット文法綱要』1965 ; 辻直四郎『サンスクリット文法』1974 ; J. ゴンダ（鎧淳訳）『サンスクリット語文法初等文法』1982 ; 平岡昇修『サンスクリット・トレーニング』I-IV. 1990-1997 ; 菅沼晃『新・サンスクリットの基礎』上・下1994, 1997などを使用する。

構成は以下のようになる。

『サンスクリット語文法』

目次

デーヴァナーガリー（Devanāgarī）文字

1. 動詞：現在形・能動態（Active）・第一種活用動詞（Thematic Verbs）
2. 名詞と形容詞の格変化；格の用法
3. 動詞：現在形・反射態（Middle）；動詞の態（Voice）
4. サンディ（Saṃdhi 音の結合）規則：母音結合
5. サンディ規則：-as, -ās の変化
6. サンディ規則：子音結合
7. 母音 -i, -ā で終わる名詞語幹の格変化
8. 動詞：過去形（Imperfect）・能動態
9. 動詞：過去形・反射態
10. 母音 -i で終わる名詞語幹、子音で終わる名詞語幹の格変化
11. -an, -ṛ で終わる名詞語幹の格変化
12. 人称代名詞の格変化
13. 指示代名詞の格変化・関係詞
14. 願望法・能動態
15. 願望法・反射態
16. 命令法・能動態
17. 命令法・反射態
18. 名詞複合語（Nominal Compounds）：格限定複合語（Tatpuruṣa）・同格限定複合語（Karmadhāraya）・並列複合語（Dvandva）・所有複合語（Bahuvrīhi）
19. 第二種活用動詞（Athematic Verbs）：第2類・現在形・過去形・願望法・命令法
20. 第二種活用動詞：第5・7・8・9類
21. 重複語幹（Redupliction）・第3類
22. 所有接尾辞；現在分詞・能動態
23. 現在分詞・反射態；絶対構文（Absolute Construction）
24. 受動態（Passive）
25. 使役法（Causative）
26. 過去受動分詞（Past Passive Participle）
27. 連続態（Gerund）
28. 不定詞；単純未来；複合未来（Periphrastic Future）；条件法
29. 完了形・複合完了・完了分詞
30. 未来受動分詞（Gerundive）
31. アオリスト（Aorist 過去）；意欲活用；強意活用；名詞由来動詞

語彙

練習問題の Roman Texts

サンスクリット語の表記文字であるデーヴァナーガリー文字については、Machintosh OS 9 付属の Language Kit を使用する予定であったが、システムの安定性を考慮して UNIX ベースのオペレイティングシステムである Machintosh OS X を使用することを検討している。OS の変化にともなってワープロ・DTP ソフトやプリンタドライヴァーのヴァージョンアップ等も必要となってくるが、それは今後の課題とする。出力機としてはポストスクリプト（PS III）対応プリンタを使用する。

本文法書の公刊によって本学の学生のサンスクリット語の理解が深まり、サンスクリット語文献講読の授業さらには卒業論文の作成に益するところがあれば幸いである。

個人研究

図書館システムの「資料組織演習」教育用ソフトウェアとしての有用性

—メタデータ構築の観点から—

研究代表者　山本　貴子
（図書館情報学）

平成11年度に行った研究「司書課程「資料組織演習」における演習用ソフトウェアの開発：授業への利用の可能性」では、コンピュータを利用して資料組織法の演習ツールを調査・分析することを目的とした。その際、目録データのコピー入力と本学独自のオリジナル入力についての教育ができ、さらに、国際的にも通用するデータの作成が可能なシステムを選択することを主眼に置いた。設定した要件に合致した ITS for Windows を用い、上記の調査を行った結果、当該システムを資料組織法の演習用ツールとすることが可能であるという結論に達した。

一方、国内外で使用されている図書館システムについ

て調査を行った際、世界的傾向として、WWW上のデータについて、図書館を含む情報サービス機関では、目録に相当するデータ（メタデータ）を作成・流通させようとしていることが判明した。これは、現代のネットワーク社会の中で、どこでどのようにすれば求める情報が探しだせるかがわからず、また、求める情報を入手することができないという点を解決する方法の一つである。このメタデータの構造はDublin Coreと呼ばれ、1995年から開始されており、2000年にオタワ、2001年に東京、2002年にはフィレンツェで国際ワークショップが開始されるなど、現在も進行中である。国内でもいくつかの大学や研究機関がメタデータを作成しており、図書館界にも多大な影響を与えている。したがって、演習用ソフトウェアにもこのメタデータの演習を取り込む必要性があると考えられる。

そこで、今年度は、資料組織法に関する既存の演習ツールについて、メタデータの構築を含めて検証することを目的とし、調査・研究を行った。

その結果、現在、メタデータを作成している研究機関では、一般的な図書館システムを使用せず、XMLを用いた独自のシステムを構築していることが判明した。したがって、本研究では、当初の研究目的を敷衍させ、本学の書誌データからXMLを用いたメタデータの構築を行うことで、その構築が可能かどうか、さらに、構築を行うにあたっての問題点を探った。

方法としては、まず、本学の図書館目録および貴重書目録から書誌データを選択した。それぞれのデータの一部をXMLに変換し、そのデータをDublin Coreのメタデータ・エレメント・セットに準拠した形式に変換した。さらに、その結果を先行研究と比較した。

その結果、Dublin Coreメタデータ・エレメント・セットの限定子を用いた場合であっても、責任表示の役割、文字、履歴など、十分には表現できない項目があることが明らかになった。

個人研究

演劇的身体表現の動作特性から考える性別役割観と性自認が社会的行動へ与える影響

—幼児教育科男女学生を対象に—

研究代表者　井上　摩紀
（体育学）

今回の研究の目的は、従来、言語を用いた質問紙法で行われてきた性役割観とジェンダー・アイデンティティの測定について、言語での測定法の検証と身体表現を用いた新たな測定法の有効性を探ることである。この目的を達成するため、いくつかの調査・実験を行った。そのうち、BSRI項目の検証について概要を報告する。

調査：BSRI項目の再分類

BSRI（Bem Sex Role Inventory; Bem, 1974）は男性性・中性性・女性性の各20項目から成り、男性性項目得点・女性性項目得点の組み合わせによって、ジェンダー・アイデンティティを測定するものである。作成過程では望まれる男・女性性を表すパーソナリティ特性を収集するという手続きがなされている。つまり、社会の「性役割期待」からの項目選定である。個人の価値観である「性役割観」が多様化していると予測される今日において、Bemが収集した項目の有用性を検証するため、BSRIの項目の再分類を試みた。

目的：大学生を対象にBSRI項目の再分類を行い、BSRIの分類と比較する。そして、BSRIをはじめとする言語を用いた性役割観・ジェンダー・アイデンティティ測定法の問題点を考える。

方法：京都・大阪の大学生（男子155名・女子372名〈うち幼児教育科学生女子145名・一般学生女子157名〉、計527名）を対象とし、BSRIの60項目を「男性的」・「どちらでもない」・「女性的」の３つに分類させた。BSRIの分類と比較するため、結果は主成分分析を用いて３成分を抽出し、バリマックス法により回転させた。

結果の処理：①全対象者についてのBSRIの分類との比較②男女比較③幼児教育科女子と一般学生女子との比較の３つを行った。

結果および考察：①全対象者における男性性項目についてはBSRIの分類と大きな変化はなく男性性については固定的な性役割観があり、時代を超え社会的期待がそ

のまま個人の価値観になっていると思われる。一方、中性性項目・女性性項目は相互に移動し、かつ、抽出数も少なかった。かつてのステレオタイプ的な女性役割期待はどちらでもない中性的な性役割観に移行し、女性性については、まだまだ不安定ではあるが、新たな価値観を作っていると考えられる。また、男・女性性で抽出数が違うことから性役割認識の強固さの違いが伺える。このように、BSRIの項目そのままでは対応しきれない性役割観の変化が認められた。②対象者中の男女比較では男子がBSRIの分類と似ており、女子がより変化している傾向が認められた。③幼児教育科学生女子と一般学生女子との比較では一般学生に比べて幼児教育科学生のほうがBSRI分類に近かった。②③の結果からBSRIの各項目は集団が異なると分類傾向が異なることが分かった。ジェンダー・アイデンティティ測定にBSRIの項目を用いるならば、個々人についての性役割観を知るため、項目の再分類を行う必要があるだろう。

また、上記の調査結果に関連して、舞台上での演劇的即興表現を用いた測定の可能性を探るべく、いくつかの実験を行った。先にBSRIでの問題点を挙げたが、その問題点を克服するため、身体表現を用いた測定の可能性を考える。先ず、性役割観の測定を行い、それと照らし合わせたかたちでのジェンダー・アイデンティティの測定が必要である。また、男・女性性を等価で表しうる性役割観の測定も必要である。今回の実験では、舞台上の空間使用時間を用いて測定を行った。身体がおかれる空間についての研究にはパーソナル・スペースやプロクセミックスなどがあり、個人の無意識レベルの意識が表れるとされている。今回の実験でも空間使用時間を用いることは意識のより深いところの被験者の性役割に関する認識を知り得る可能性がある。

本実験は大学生16名（男子9名・女子7名）を対象とし、正方形を9等分割した舞台上において演劇的即興表現で「男らしさ」「女らしさ」「自分」を演じさせた。分割した各空間ごとの使用時間を求め、男・女性性の表現と自分表現との空間使用の傾向を比較することで、性役割観とジェンダー・アイデンティティの測定を試みた。今後、実験結果をまとめ、身体表現を用いた測定の有効性について考察していきたい。

真宗総合研究所彙報　2002.10.1～2003.3.31

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇11月15日(金)　17時50分（真総研ミーティングルーム）

1．2003年度一般研究の選考について

2．その他

◇3月20日(木)　15時（真総研ミーティングルーム）

1．2003年度指定研究の研究組織について

2．その他

○指定研究キャップ連絡会

◇2月24日(月)　16時10分～（響流館4階会議室）

1．今年度の研究の進捗状況について

2．来年度の指定研究について

○2003年度一般研究研究代表者説明会

◇1月8日(水)　16時10分（響流館4階会議室）

1．研究遂行上の準備と諸注意について

2．その他

○共同研究「井上円了と清沢満之」（円満研究会）

◇12月7日(土)・8日(日)（東洋大学箱根保養所）

・参加者：寺林脩、織田顕祐、安冨信哉、一楽真、木越康、宮崎健司（以上大谷大学）
三浦節夫、清水乞、森川滝太郎、滝田夏樹、柴田隆行（以上東洋大学）

・発表者とテーマ：一楽真「『精神界』をめぐって」
三浦節夫「井上円了と『新仏教』運動」

○中国蔵学研究中心との座談交流会

◇11月18日(月)　15時30分～17時（第3会議室）

■指定研究研究会

清沢満之研究

《『清沢満之全集』合同編集会議》

◇11月28日(木)　14時30分～17時（真総研ミーティングルーム）

『清沢満之全集』第1巻発刊と次巻編纂に向けて

《資料調査》

◇2月14日(金)（同朋大学、名古屋市祐誓寺）

『清沢満之全集』掲載用資料の返却と借用

《『清沢満之全集』入稿反省会》

◇2月28日(金)　19時30分～（下鴨桐生）

1、原稿作成上の問題点について

2、今後の作業日程について

真宗学事史研究

《『大谷大学百年史資料編付録―「学徒出陣」・「勤労動員」体験資料集―』の編集・刊行に関する業務》

〈編集会議〉

◇10月18日(金)　18時（真総研ミーティングルーム）

◇11月８日(金)　13時（真総研学事史研究研究スペース）

〈編集と読み合せ、問題点の検討〉

◇12月２日(月)　17時（真総研学事史研究研究スペース）

◇12月６日(金)　15時（真総研学事史研究研究スペース）

◇12月９日(月)　14時（真総研学事史研究研究スペース）

◇12月13日(金)　15時（真総研学事史研究研究スペース）

◇12月16日(月)　17時（真総研学事史研究研究スペース）

◇12月20日(金)　16時（真総研学事史研究研究スペース）

◇１月10日(金)　16時（真総研学事史研究研究スペース）

◇１月17日(金)　16時（真総研学事史研究研究スペース）

◇１月24日(金)　16時（真総研学事史研究研究スペース）

◇２月３日(月)　16時（真総研学事史研究研究スペース）

◇２月10日(月)　17時（真総研学事史研究研究スペース）

◇２月12日(水)　10時（真総研学事史研究研究スペース）

◇２月14日(金)　10時（真総研学事史研究研究スペース）

◇２月17日(月)　14時（真総研学事史研究研究スペース）

◇２月18日(火)　13時30分
（真総研学事史研究研究スペース）

◇２月20日(木)　16時（真総研学事史研究研究スペース）

◇３月３日(月)　16時（真総研学事史研究研究スペース）

◇３月10日(月)　13時（真総研学事史研究研究スペース）

◇３月12日(水)　10時（真総研学事史研究研究スペース）

《大学史資料協議会西日本部会
第三回研究会並びに交流会》（出席者　東舘紹見）

◇12月４日(水)　研究会　14時30分
（龍谷大学大宮学舎清和館、西本願寺書院・飛雲閣）
交流会　17時30分（京都東急ホテル）

《研究会》

◇３月28日(水)　16時（真総研ミーティングルーム）
本年度真宗学事史研究の成果と課題（東舘紹見）

真宗教学研究

《研究会》

〈親鸞加点本『玄義分』の翻刻作業〉

◇９月12日(木)　16時（真総研ミーティングルーム）

◇９月27日(金)　16時（真総研ミーティングルーム）

◇10月４日(金)　16時（真総研ミーティングルーム）

◇11月18日(月)　10時20分（真総研ミーティングルーム）

◇11月25日(月)　10時20分（真総研ミーティングルーム）

◇12月２日(月)　10時20分（真総研ミーティングルーム）

◇12月９日(月)　10時20分（真総研ミーティングルーム）

◇12月16日(月)　10時20分（真総研ミーティングルーム）

◇１月20日(月)　10時20分（真総研ミーティングルーム）

◇２月10日(月)　10時20分（真総研ミーティングルーム）

〈聖教編纂作業の経過と問題点の総括、および今後取り組むべき聖教編纂の方向性についての検討〉

◇２月20日(木)～21日(金)（湖西キャンパスセミナーハウス）

仏教・他宗教比較研究・国際真宗学研究

《研究会》

〈『教行信証』の独訳〉

◇10月２日(水)　18時（真総研ミーティングルーム）

◇12月11日(水)　18時（真総研ミーティングルーム）

◇１月８日(水)　16時（真総研ミーティングルーム）

◇２月12日(水)　13時（真総研ミーティングルーム）
大谷大学・マールブルク大学学術交流に向けての打ち合わせ

◇３月６日(木)　14時30分（真総研ミーティングルーム）
同上

《公開講演会》

◇10月15日(火)　15時（響流館３Ｆメディアホール）
ハンス＝マルティン・バールト（マールブルク大学教授）「ルターと親鸞―『世俗化』をめぐって」

《公開ゼミナール》

◇10月22日(火)　16時（博綜館５Ｆ第二会議室）
ハンス＝マルティン・バールト（マールブルク大学教授）「世俗化について―１」

◇10月23日(水)　14時30分（博綜館５Ｆ第二会議室）
ハンス＝マルティン・バールト（マールブルク大学教授）「世俗化について―２」

西蔵語文献研究

《研究会》

◇９月26日(木)　16時10分（真総研ミーティングルーム）
「チベット出張報告」嘱託研究員・三宅伸一郎

◇12月16日(月)　16時10分（真総研ミーティングルーム）
今年度の研究活動の状況報告と今後の活動の打ち合わせ

◇３月５日(水)　16時10分（真総研ミーティングルーム）
早稲田大学大学院・野村正次郎を交えて、TLK の Mac OS X 対応にむけての打ち合わせ

《公開研究会》

◇２月12日(水)　13時10分（響流館４Ｆ会議室）
「中国におけるチベット学の現状について（Krung go'i bod pa'i zhib'jug tshan pa'i gnas tshul）」中国蔵学研究中心宗教研究所所長・ダムドゥル（dGra'dul）氏

パーリ語文献研究

《研究会》

◇10月31日(木)　16時10分（マルチメディア演習室）

・飯島明子（天理大学国際文化学部助教授）

「タイ・ラオスにおける貝葉写本」

◇12月19日(木)　15時（響流館4階会議室）

・村上晋弘（本学修士課程）

「大谷大学所蔵貝葉写本文献 Dukammanika-jātaka の文献的研究」

・村西弘行（本学修士課程）

「大谷貝葉写本：Cāgadāna-jātaka について」

◇1月30日(木)　15時（響流館4階会議室）

・畝部俊也

「最近のアメリカにおけるパーリ仏教及び写本研究の現況」

・荒牧典俊「現在の写本研究について」

◇3月17日(月)　15時（マルチメディア演習室）

・古谷伸子（本学修士課程）

「パリッタ儀礼の伝統」

・長崎法潤

「報告：バンコク／ワット・ポー寺院におけるマハーチャーについて」

・田辺和子・清水洋平

「ワット・ポー寺院におけるパンニャーサジャータカ写本撮影状況報告」

《資料調査》

◇3月2日(日)～3月12日(水)

・田辺和子（嘱託研究員）・清水洋平（研究補助員）

ワット・ポー寺院（バンコク）所蔵の貝葉写本の調査

和漢文献研究

《研究会》

◇12月5日(木)　16時30分（図書館グループ閲覧室3）

北京図書館善本部について（北京図書館善本部、李際寧氏）

《「漢文仏教文献の調査と研究」班研究会》

◇10月30日(水)　17時30分（真総研）

・稀覯仏教典籍の選定に関して

・図書館所蔵貴重書との関係について

◇11月18日(月)　14時20分（旧図書館貴重書閲覧室）

図書館貴重書『法華開示抄』（余甲32・33、余丙17・19）の実物調査

《「和漢文化財の調査と研究」班研究会》

〈博物館資料等に関する検討〉

◇10月2日(水)　17時～18時（図書館グループ閲覧室3）

◇12月12日(金)　10時40分～12時

（図書館グループ閲覧室3）

◇3月6日(木)　16時30分～18時（響流館4F会議室）

〈図書館出品目録データベース入力作業打合会〉

◇12月2日(月)　14時30分～15時30分（聞思館研12）

◇3月28日(金)　15時～16時（聞思館研12）

《大蔵経学術用語研究会理事会》

（出席者、キャップ木村宣彰）

◇3月28日(金)　15時～17時

（立正大学大崎キャンパス1号館4階第7会議室）

共同研究課題としての仏典データベース研究の推進に関して

大谷大学FD研究

《公開研究会》

◇10月10日(木)　18時（マルチメディア演習室）

滝川義弘（本学教育研究支援部教育研究支援課長）

「FDを核とした大学づくりを考える」

◇11月14日(木)　18時（響流館第1演習室）

ロバート・F・ローズ

「『演習』授業活性化の試み

―学生の主体的学びの場として―」

◇12月20日(金)　18時30分（第3会議室）

崎野　隆

「教育実習生の反省録から考えさせられる

授業方法についての一試案」

◇1月24日(金)　18時（マルチメディア演習室）

成田秀夫（河合文化教育研究所・河合塾講師）

「考えさせる教育の工夫

―河合塾講師による多摩大学での実践例―」

《大学コンソーシアム京都　第8回FDフォーラム》

◇3月9日(日)　（キャンパスプラザ京都）

第2分科会「意欲の喚起と動機づけ」

並木　治（コーディネーター）

中村博幸（京都文教大学人間学部助教授）（基調提案）

ロバート・F・ローズ（報告者）

大谷大学DB研究

《研究会》

◇11月1日(金)　17時50分～20時

（響流館3階マルチメディア演習室）

山本貴子

「音声のデジタル処理：北里蝋巻の概要」

◇12月13日(金)　17時～19時
（響流館３階マルチメディア演習室）
有松志保
「高精細デジタル画像スキャニングの実際
—現場からの報告—」

■客員研究員
郑　堆（dGra' dul）
国　籍　中華人民共和国
現　職　中国蔵学中心　宗教研究所所長
研究期間　2002年12月15日～2003年３月15日
研究課題　「On the Great Treatise on the Stage of the Path to Enlightenment」
指導教員　白館戒雲教授

■人事（2003年４月１日付）
研究所長　（新）兵藤一夫　（旧）寺林　脩

研　究　所　報　第42号
2003年４月１日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143　京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8161　Fax. 075-411-8162